

杜甫と白居易—その「独善」と共生思想—

下定 雅弘

はじめに

杜甫と白居易とは、全く詩風の異なる詩人として扱われてきた。たしかに杜甫の詩の精妙と、白居易の平明とは大いに異なる。

だが杜甫と白居易には、実は大きな共通点がある。それは内容にも外面にも見ることができる。内容とは、詩の意味するところ、論理・感情等であり、外面とは用いる言語や技法のことである。

ここでは外面について見やすいことを一つだけあげると、その制作量の多さである。

杜甫の詩は 1457 首が伝わっている（『杜詩詳注』の収載数）。唐の詩人で最も多数を制作した白居易が 2863 首（『全唐詩』）であるのに比べれば絶対数では少ない。しかし、その制作頻度は杜甫の方が白居易よりも高いのである。

杜甫の場合、四十歳までは総数がわずか 40 首強、詩作が伝わらない年もあるので、四十歳以後亡くなるまでの詩につき概算すると、年平均 70 首強を作っている。白居易の場合、二十八歳までは毎年数首以下である。そこで一定の分量のある二十九歳から七十五歳までの 47 年につき、毎年の詩作数を平均すると 60 首程度となる。なんと、杜甫の詩の制作頻度は白居易よりも高い。

白居易の詩は日記のように詠われたものだが、杜甫はその先駆なのである。このことは、杜甫の詩の内容の幅広さ・豊かさに直結している。天下国家の問題、自己の不遇と漂泊、山水の美、家族への愛、友情、飲食の喜びに至るまで、杜甫は大小・公私様々な事柄を日記を書くように詠い続けた。杜甫の詩には人生の全てがあるといって過言でない。

白居易の詩は百科事典のようだと言われるが、杜甫の詩はこの点においても白詩の先駆なのである。

小稿は、杜詩と白詩における、内容・外面の大きな共通点を指摘し、それによって、杜甫の先駆性を確認するとともに、両者の詩の味わいをさらに豊かにし、深めようとするものである。

上篇一内容について、その「独善」

杜甫の一生は、左拾遺と地方官の2年余りを除き大部分は漂泊のうちに在った。その詩の多くは、自然、漂泊の悲哀に満ちたものとなる。

だがこれまで杜甫の詩については、「杜甫は一生愁う」（南宋・胡仔《漁隱叢話》前集卷二十四）という語を初めとして悲しみの面が強調されすぎてきた。人はどんなに苦しい境遇にあっても、何か喜びや楽しみを見出して生きるものである。杜甫自ら「人生は悲しみと楽しみが半ばしている、天地にも順があれば逆もある」（「白水崔少府十九翁高齋三十韻」0139）というように、悲哀と苦悶の日々の中で、数々の喜びを見出して生きている。

兼濟と独善—公への献身と私の喜び—

そのように見れば、次世代の白居易の「兼濟」「独善」の人生観は杜甫の詩を読む上で有効な補助線になる。「兼濟」とは「兼ねて済う」、広く人民の窮乏を救うために官職に就き活躍すること、現代の言葉でいえば公（仕事）の充実である。「独善」「独り善し」とは、公務を離れた時の私的な場での喜びである。二つの言葉はもと『孟子』（尽心上）の語である。ただし『孟子』では、「独善」は不遇の時も独り修養に努めるの意だったものが、白居易がこれを私的な喜びの意で用いたのである。¹

¹元和十年十二月、江州で元稹に宛てて書いた手紙「元九に与うる書」に、自分がこれまでに書いた詩を分類してこういう、「……共に一百五十首、之れを諷諭詩と謂う。又た或いは公より退きて独り処り、或は移病して閑居し、足るを知り和を保ちて、情性を吟翫する者一百首、之れを閑適詩と謂う」。この次の段落で、本来『孟子』の語である「兼濟」「独善」との関係についてこう定義づける、「之れを諷諭詩と謂うは兼濟の志なり。之れを閑適詩と謂うは独善の義なり」。ならば、白居易において「独善」とは、「閑適」であり、「公より退きて独り処り、或は移病して閑居し、足るを知り和を保ちて、情性を吟翫する者」である。「独善」とは、公務（皇権の領域）から離れている時の私的な時間・空間における快適であり、一言でいえばプライベート

杜甫もまた、白居易と同じように、その苦難に満ちた人生の中で、日々、「独善」すなわち、家族と共にある喜び、動植物を愛する喜び、飲食の喜び等を追求している。

杜甫の「兼濟」の情熱とそれが果たされない悲哀を味わうと同時に、その「独善」の喜びに目を向けるなら、杜甫の詩は従来よりもっと多様で深い感動を与えてくれるにちがいない。

「兼濟」は、杜甫の語でいえば、「經濟（經世濟民の略、世を治め民を救う）」（「石犀行」0489）、「濟時（時を濟う）」（「歲暮」0697）、「濟世（世を濟う）」（「奉待嚴大夫」0726）等に当たる。

この兼濟について、白居易が杜甫を学んだのは周知のことである。それは白居易が「与元九書」に述べている通りであり、詩道の先達として杜甫を尊崇している。

「杜詩最多、可傳者千餘篇、至於貫穿今古、翻縷格律、盡工盡善、又過於李。然撮其「新安吏」「石壕吏」「潼関吏」「塞蘆子」「留花門」之章、「朱門酒肉臭、路有凍死骨」之句、亦不過三四十首。杜尚如此。況不逮杜者乎？僕嘗痛詩道崩壞、忽忽憤發、或食輟哺、夜輟寢、不量才力、欲扶起之」、杜甫の詩は、価値ある作が最も多く、世に伝えるべき作が、千余首もあります。古今の詩の素晴らしさをそなえ、詩の格式規律を見事に運用し、技巧の限りを尽くし究極の見事さを示すもので、李白よりもさらに上です。けれどもその「新安吏」「石壕吏」「潼関吏」「塞芦子」「留花門」といった詩や、「朱門に酒肉臭きに、路に凍死の骨有り」といった句は、やはり三四十篇に過ぎません。杜甫ですらこうなのですから、ましてや杜甫におよばないものはいうまでもないでしょう。私はいつもこの詩道の崩壊をくやしく思い、狂おしいほどに憤りの念にかられて、食事も喉を通らず、夜は寝ることもできないありさまで、自分の非力をもか

トの快適・快樂である。白居易は元和十年、「与元九書」において、この「独善」を「兼濟」に並立させる人生観を確立し、以後「独善」の内容を生涯にわたって無限に豊かに発展させていった。

えりみず、詩道の復興に貢献したいと願ったのです。

「詩道」に適う作品が、少ないとはいえ杜甫にあるという。「三吏」その他の詩は、白居易が詩道を復興させる上での典範だったのである。

また実作において、諷諭詩・新樂府は、近い先達として杜甫が意識されている。この「兼濟」の面に関しては、杜甫についても、白居易についても、従来、十分に論じられてきているので、小稿では贅言しない。しかし、独善の面における近似については、これまで研究はほとんどなされていない。²

以下、杜甫の独善に焦点を当て、その概要を述べる。杜甫の主な独善は、次の幾つかに分類できる。一 愛の喜び、二 山水に遊び景物を愛でる喜び、三 飲食の喜び、四 画を見る喜び、五 兼濟と対立する憧憬—東遊と仙道・仏教、六 詩作の喜び。

各類の作品中、白居易が吸収し、自らの作に変形した杜詩の表現は数多い。その重要な例については、以下随時言及する。

一 独善の杜甫

一 愛の喜び

[妻への愛]

妻への愛といえば「月夜」0141である。

今夜鄜州月、閨中只獨看。遙憐小兒女、未解憶長安。

香霧雲鬢濕、清輝玉臂寒。何時倚虛幌、雙照淚痕乾。

至徳元年（756）、反乱軍に捕らえられて長安に在る時、月を眺めつつ疎開先の鄜州にいる妻子を思う詩。妻の姿・所作の艶麗な表現、脳裏に浮かぶ再会の場面には感嘆せずにおれない。

「月夜」は、詩の世界に、愛する女性への真率な愛情を詠い、しかもこれほど美し

² 私のこの問題についての研究は以下の通り。日本語論考：「杜詩における「独善」—その食の喜び—」（『白居易研究年報』14、2013. 12。101-132）、 「杜甫における独善—最晩年の南征をめぐって—」（『中国文史論叢』10、2014. 3。13-39）「杜甫における独善—その飲酒の喜び—」（『新しい漢字漢文教育』58、2014. 5。36-46）。「杜甫の詩の魅力—その内容と形式—」（『杜甫全詩訳注』2、講談社学術文庫、2016. 7。897-924）、「杜甫の詩の魅力」1-13（『葦牙ジャーナル』125-137、2016. 8-2018. 8）。漢語論考：《杜甫的独善》（《首届詩聖杜甫與中華詩學國際學術研討會論文集》、2018. 4。《杜甫的「独善」—兼論其對仙境、仙道的憧憬》（《中国唐代文学学会第十九届年会暨唐代文学國際學術研討會論文集》上冊、2018. 8。361-367）。

く表現したものとして³、『詩経』大序の「詩は情に発するも礼儀に止まる」の観念を強固に頭にインプットしてしまった、知識人の文学に大きな風穴を開けたものといえる。中国における女性への愛の歌の八百年の寂寞を破ったものである。

[子供への愛]

杜甫には二人の男の子、二人の娘がいた。大暦三年(768)の正月、夔州で、十五歳となった次男の宗武に与えた詩(「又示宗武」1289)は、詩作に興味を持つようになってきた我が子の成長を喜ぶ詩。「志学」を初め重要な古典の典拠を幾つも用いて、お前もこういう典拠を詩に詠むこむようになりなさいと実作で示している。

杜甫の詩には妻と子供とが、しばしばさりげなく登場する。

「羌村三首」0185～0187・「北征」0188は、鄜州の家族のもとに帰った時の作。妻と子供たちの様子、服がつぎはぎだらけであることや、娘が母の真似をして化粧し滅茶苦茶な顔になること等を具さに描写している。

成都での作。「江村」0401。長く放浪してきた杜甫は、上元元年(760)、成都に至り草堂を構えてやっと落ち着いた暮らしができるようになった。

清江一曲抱村流、長夏江村事事幽。自去自來堂上燕、相親相近水中鷗。

老妻畫紙為棋局、稚子敲針作釣鉤。多病所須唯藥物、微軀此外更何求。

清らかな錦江が一曲がりして村を抱えて流れている、この川ぞいの村では日の長い夏はなにもかもが静かでゆったりとしている。梁の上にはいつのまにか燕が行ったり来たりしているし、水の中の鷗はお互いに親しみ近づきあっている。家では老妻が紙に線を引いて碁盤をこしらえ、子供は針を敲きまげて釣り

³ 愛し合う二人が遙か離れた地で同じ月を見る表現は、謝莊「月賦」(『文選』卷十三)に「美人邁兮音塵闕、隔千里兮共明月」と見える。「雲鬢」は、類似の語が曹植「洛神賦」(『文選』卷十九)に「雲鬢娥娥、修眉聯娟」とある。腕が細く白いのは美女の条件の一つである。例えば古詩十九首其二(『文選』卷二十九)に「娥娥紅粉粧、織織出細手」。費昶《華光省中夜聞城外擣衣》(《玉灣新詠》卷六)に「金波正容與、玉步依砧杵。紅袖往還縈、素腕參差舉」、月光が黄金色にたゆたう時、……砧打つ真っ白い腕が次々と上がる。降り注ぐ月光の下、美女の白い腕がまぶしいようだ。

針を作っている。今、病身の自分に必要なものは薬品のたぐいばかりで、それ以外のものはこの瘠せた身体には何もいるものはない。

杜甫はこの後、妻と暮を打ち、子供と浣花溪で釣りをするのだろう。ほほえましい幸せな情景だ。

人への愛については、この他、弟妹を思っ⁴の作、李白を慕い、友人（高適・鄭虔・岑）を思っ⁴の作が数多く詠われている。召使への思いが感謝をこめつつ多数詠われていることにも注意すべきである。⁵

[動物への愛]

杜甫は、中国で、詩において、犬を人間と同じように感情を持つ存在として表現した初めての詩人である。

天宝十三載(754)春の作「重ねて何氏を過ぎる五首」其二 0084 にいう。「犬迎曾宿客、鴉護落巢兒」。前年の夏、杜甫は何將軍の山莊に將軍の友人鄭虔に付き添って遊びに行っていて、ここに一年ぶりに再び招かれてやってきた。それが、犬は杜甫を覚えていて尻尾を振って向かえてくれたのである。「舎弟の消息を得たり」0250 でも、久しぶりに洛陽の旧居に帰ったところ、「舊犬⁶知愁恨、垂頭傍我床沈」。沈んだ気持ちでいると、前からいる犬が私の憂いを知って、頭を垂れて私の寝台の傍に寄り添ってくる。全く人間と同じである。「草堂」0739 でも、三年ぶりに草堂にもどってみると「舊犬喜我歸、低徊入衣裾」と、犬が人間と同じ感情を持つ存在として登場している。

白居易もまた、人はもちろん愛するし、動物についても、そして生き物でないものに対してさえ、長く接していると深い愛着を持ち、それを詩に表現する詩人である。白居易は、イヌと鶴と馬とを自分の家族として（のようにではなく）愛している。こ

⁴ 「元日寄韋氏妹」0147、「憶弟二首」0248/0249、「得舎弟消息」0250、「得舎弟觀書自中都已達江陵……」1093 等等。

⁵ 「示獠奴阿段」0874、「信行遠修水筒」0910、「課伐木」序 1121：「課隸人伯夷、辛秀、信行等入谷斬陰木人日四根止」、「秋行官張望督促東渚耗稻向畢清晨遣女奴阿稽豎子阿段往問」1130 等等。

⁶ 昔から飼っている犬。陸機の話がある。陸機は黄耳という犬を飼っていた。洛陽にいて長く家族と音信がなかった時、黄耳に「手紙を持って行き、返事をもらって帰ることができるか」と笑いながら尋ねると、黄耳は家を訪ね、消息を得て洛陽に帰ってきた（『晋書』五四「陸機伝」）。

ここではイヌの表現を見ておこう。その描写は、ほとんど杜甫と同じである。

「早興(早に興く)」1400にいう。「晨光出照屋梁明、初打開門鼓一聲。犬上階眠知地溼、鳥臨窗語報天晴」、朝日が射して家々の棟は明るくなり、開門の合図の鼓がなった。犬は地面が湿っているのをいやがり階段の上で眠り、鳥は窓に向かって囀り晴れた空を告げる。

長慶四年(824)、杭州での作。白居易は、杭州の役所でも犬を飼っていた。地面の湿り気をいやがってとは、ふだんから犬の暮らしぶりをよく見ていて初めていえることである。しかも犬の身になっている。

「犬鷲」3016、その前半。「晚來天氣好、散歩中門前。門前何所有、偶睹犬與鷲。鷲飽凌風飛、犬暖向日眠。腹舒穩貼地、翅凝高摩天」、夕方になり天気がよくなったので、門の前を散歩した。門の前に何があるというわけではないが、たまたま犬と鷲とを見つけた。鷲は餌を食べ飽きて風を凌いで飛んでゆき、犬は暖かいので日向ぼっこをして寝ている。犬の腹はゆったりと地面にへばりつき、鷲は翼が天に届かんばかりに高く飛んでいる。

大和九年(835)、白居易64歳の作。洛陽履道里で、春の気候のよい時の情景である。のんびりと気持ちよさそうに日向ぼっこしている犬の姿が目につかぶ。

「臥疾來早晚」3436、その前半。「臥疾來早晚、懸懸將十旬。婢能尋本草、犬不吠醫人」、病に臥したのはいつだったか、心が安まらないまいつのまにか百日になろうとしている。下女は念入りに本草の書物を調べ、犬は医者にも吠えかからなくなった。

開成五年(836)の作。医者がしょっちゅう来ていて、はじめは吠えていた犬が、もう吠えなくなってしまった、その様子が目につかぶ。

犬もまた洛陽履道里の邸宅に、白居易とともに暮らす、身内の一人だったのである。

杜甫は自分を馬になぞらえることが多い。「遣興二首(興を遣る二首)」其二0278は、自らを千里の馬に比し自己の才能への誇りを示している。逆に、「病馬」0333 三は、長年乗ってきた馬が心臓病になったことを詠じ、これに自分の姿を見ている。

鳥は鷹・燕・鷗を愛した。鷹はその覇気と勇壯に憧れている(「義鷗行」0222・「姜楚公畫角鷹歌」0565 他)。燕と鷗が登場する典型的な例を挙げておく。

広徳元年(763)、閩州での作「双燕」0619に、つがいの燕が巣を作りに来たのを見ている。

旅食驚雙燕、銜泥入北堂。應同避燥濕、且復過炎涼。

養子風塵際、來時道路長。今秋天地在、吾亦離殊方。

旅住まいの中でつがいの燕に驚いた、妻の部屋に泥をくわえて入ってきたのだ。つがいで一緒に乾燥や湿気を避け、また暑い夏から涼しい秋までの時季を過ごす。雛を育てるのは兵塵の中だったろう、ここまでの道のりも遠かったろう。空を飛べる天地はある、今年の秋には燕と同じように私もこの異郷を去ろう。

燕は、漂泊の旅客である杜甫夫婦の分身といってもいい、杜甫に慕わしい鳥である。

燕は鷗とともに成都の草堂での共同生活者でもあった。上元元年、錦江の水が漲った時の作「江漲」0402にいう。「細動迎風燕、輕搖逐浪鷗」。広徳二年(764)春、成都にもどってきたの作「春帰」0737にもいう。「遠鷗浮水靜、輕燕受風斜」

燕と鷗は、草堂でのほとんど杜甫家族との共同生活者である。

動物への愛は犬・馬・鳥にとどまらない。

大暦元年(766)の作「白小」1026では、魚を食用に取りつくすことを難詰してこういう。

白小羣分命、天然二寸魚。細微霑水族、風俗當園蔬。

入肆銀花亂、傾筐雪片虛。生成猶拾卵、盡取義何如。

白魚が小さいのは天が分け与えた運命、生まれつき二寸の魚だ。とても小さいが魚介の仲間で、夔州の風俗では畑でとれる野菜の代わりにされる。魚屋に入荷する時には、銀の花が乱れるようであり、筐を傾けて他の容器に移すと、雪のかけらがすっかりなくなってしまうかのよう。天が生育したものなのに卵までも拾ってしまうが、全て取り尽くすのは、道理としていかななものか。

大暦元年(767)冬、夔州での作「縛雞行」1045は、鶏が虫や蟻を食べるので、僕が鶏を市場に持ってゆくのを、持っていけば鶏は殺されると、やめさせる。だが杜甫はここで深刻に悩む。詩の後半。「蟲雞於人何厚薄、吾叱奴人解其縛。雞蟲得失無了時、注目寒江倚山閣」、虫と鶏とで人間との関係の深さに違いがあるわけではない、召使いを叱って鶏の縛りをほどかせてやった。だが鶏と虫との利害関係を解決することはできそうもない、冬の長江を見つめつつ山中の家にもたれかかる。

鳥を人間と同じように、生きとし生けるものとして、同類のように詠じる作で、白居易に杜甫を意識したと思われる作がある。

「晚燕」0318は、元和十二年(817)あるいは十三年、江州での作。

百鳥乳雛畢、秋燕獨蹉跎。去社日已近、銜泥意如何。

不悟時節晚、徒施工用多。人間事亦爾、不獨燕營窠。

他の鳥はみな子を生み終わったが、燕はこれから子を生むために、社日も近くなって、ほどなく南国に帰らねばならぬにも拘わらず、泥を含んで巣を作り、時節の晚いのも悟らずに、頻りに労力を費やしている。人もこれと同じだ、巣を作る燕ばかりではない。

燕がほどなく南国に帰らねばならないのに、子を産むためにその巣を作るのを見て、自己の身世と同じだと詠じている。世の動きをしっかりと見て、適宜対応することのできない自らの処世の拙を燕に見ているものと思われる。杜甫「双燕」が乱世の中での子育ての難儀を自分たち夫婦と同じだと思うのと通じるところがある。

また「贖雞(鶏を贖う)」0319にいう。「常慕古人道、仁信及魚豚。見茲生惻隱、贖放雙林園」、常々古人の道の仁愛・誠実の心が魚や豚にまで及ぶのを慕っている。それで、この悲惨なありさまを見て憐愍の情を生じ、買い取って寺院の園に放してやった。

これは、鶏の命を助ける点、杜甫の「縛鶏行」(上掲)を意識するだろう。

生きとし生けるものの全てを、自らと、人間と同じく健気に生きるものと思うその心情は、現代の語でいえば共生の思想⁷である。杜甫も白居易もこの思想をしっかりと持っている。そして、それが動植物を詠じるあらゆる表現に見て取れる。

【花木への愛】

花木への愛についても、唐詩における主役は杜甫と白居易である。

杜甫は花を愛した。「死ぬほどに」。「江畔独歩花を尋ねる七絶句」其七 0475。

不是愛花即欲死、只恐花盡老相催。繁枝容易紛紛落、嫩蕊商量細細開。

花を愛さないのなら死んだほうがまだ、心配だ、花が尽きたら老いが早まるのではないかと。枝いっぱい溢れる花々は軽はずみにもはらはらと落ちてしまう。だから幼い柔らかな花よ、よくよく考えて慎重に開いておくれ。

上元二年(761)、杜甫の漂泊の生活の中で、唯一やや落ち着いた日々だった成都での作。杜甫は、春に咲き誇る花の命とともに自己の生命力が蘇ることを期待している。

左拾遺として朝廷に仕えていた乾元元年(758)春の作。「曲江二首」其一 0207

一片花飛減卻春、風飄萬點正愁人。且看欲盡花經眼、莫厭傷多酒入唇。

⁷ 上篇の終わりに詳述する。

江上小堂巢翡翠、苑邊高塚臥麒麟。細推物理須行樂、何用浮名絆此身。

ひとひらの花びらが散ってさえ春はそれだけ衰える、それがいま無数の花びらが風に翻ってまさに人を愁えさせる。しばらくは目の前に散っていく花を眺めよう。酒を飲み過ぎて身を損なうことも気にしないでおこらう。水辺の小さな建物にはカワセミが巣くい、芙蓉苑のあたりの墓には石造りの麒麟が倒れている。つくづくと物事の道理を推し量ってみれば、人生は楽しく過ごすのが何よりだ。どうして虚名にしばられて生きる必要があるだろう。

「一片花飛滅却春、風飄万点正愁人」は真に絶妙。曲江のほとり、まずひとひらの花がゆっくりと地に落ちていく。次の瞬間、街に風が吹き荒れ無数の花びらが眼前に飛び散る。映画の画面の全てを覆うように。杜甫以外の誰がこんな句を作れるだろう。

上に一首を挙げたが、成都では花と戯れる詩が多い。「絶句漫興九首」0434～0442では、春を擬人化し、春の訪れを喜びながらも、春の生命力に恨み言をいっている。ここには春と花に対する杜甫の幸せなアンビバレンツ（愛情と怨嗟の共存）がある（下編「口語の使用」を参照）。

宝応元年（762）、成都での作「三絶句」其一 0540：

楸樹馨香倚釣磯、斬新花蕊未應飛。不如醉裏風吹盡、何忍醒時雨打稀。

ヒサギの木が花の香りを放ちながら川原の岸に立っている、開いたばかりの花はまだ飛び散ってしまっただけにはいけないのに散ってしまう。それなら私が酔っている間に風がみんな吹き散らしてしまうのがいい、酔ってもいない時に雨に打たれて残り少なくなってしまうのには耐えられない。

散る花びらを擬人化して、おれが酔っているうちに散ってくれと文句をつけている。

永泰元年（765）冬、杜甫、五十四歳、夔州雲安での作。「十二月一日三首」其三 0856

即看燕子入山扉、豈有黄鸝歷翠微。短短桃花臨水岸、輕輕柳絮點人衣。

春來準擬開懷久、老去親知見面稀。他日一杯難強進、重嗟筋力故山違。

来月新春になれば、雲安でも燕が家の中に入って巣作りするのを見るだろう。故郷と同じく黄鸝が翠の山々を飛び回るだろう。小振りの桃の花が水際に咲き、柳の絮がはらはらと衣服に落ちかかる風情を目にするにちがいない。来春には故郷でみなと心おきなく語り合いたいが、こう年を取っては顔を合わせる知人も少ないだろう。その時、一杯の酒も私にはなかなか飲めないが、さらに嘆くのは体力が落ちてしまっ

て故郷に帰れないままにいることだ。

杜甫は、都に帰ろうとして、衰えた身体を考えると成都から陸路を取るのではなく、長江を下って、「即從巴峽穿巫峽、便下襄陽向洛陽」（「聞官軍收河南河北」0601）、すぐに巴峽から巫峽を通り抜け、そのまま襄陽に下って洛陽へ向かおう、と、水路で洛陽及び長安に帰ろうと考えて、夔州までやってきていた。しかし、身体は弱るばかりで、帰郷の望みは日増しに小さくなってゆく。前半は、その悲哀の中で、まもなく来るだろう春の景色を想像したのである。

この春景は、悲哀か喜びかを超えて、その美しさが私たちの心を打つ。柳絮が衣にふりかかるのが、なやましい。

同じく、大暦五年春、潭州での作。桃の花が落ちるのを詠った詩がある。「風雨看舟前落花戲為新句風雨に舟前の落花を看戯れに新句を為る」1432。

江上人家桃樹枝、春寒細雨出疏籬。影遭碧水潛勾引、風妒紅花卻倒吹。
吹花困懶傍舟楫、水光風力俱相怯。赤憎輕薄遮入懷、珍重分明不來接。
濕久飛遲半欲高、縈沙惹草細於毛。蜜蜂蝴蝶生情性、偷眼蜻蜓避伯勞。

……花の落ちる影が緑の水の上に映ると水はひそかに花を引っ張りよせようとする、すると風はそれを嫉んで紅い花びらを下からさかさまに吹き上げる。吹かれた花は疲れてものうげに舟の側にやってきて、水面のきらめきも風の方もみんな怖いという風である。花がいつでもふところに飛びこんできて軽薄なのは憎たらしいが、遠慮してはっきりとあちらに飛んでいき近づかないのは褒めてやっていい。……

桃の花が散るのは、今の暦でいえば三月の終わり。桃の花を風雨に翻弄される少女に擬人化し、その散るさまを一篇の物語のように細かく描写している。たゆたい揺れ動く落花に、杜甫は漂泊の我が身を重ねているだろう。

花を愛した杜甫は樹木をも愛した。最も愛した樹木は松と竹と楠である。

竹への愛が分かる詩を挙げよう。

宝応元年(762)、成都での作「三絶句」其三 0542

無数春筍滿林生、柴門密掩斷人行。會須上番看成竹、客至從嗔不出迎。

無数の筍が林中に生えた、我が家の柴の門をこっそり閉ざして誰も門前を通るものもない。最初出た筍を見守って竹に仕上げ、あたりを竹だらけにしてお客が来てまごついて怒ろうとも勝手に怒らせて竹林に隠れて迎えなどすまいと

思う。

まるで、子供の隠れん坊である。杜甫にはこういう可愛いところがある。

松についてやや詳しく述べておく。長い時間をかけて作られた人と樹木との物語がある。

杜甫は、上元元年(760)、草堂が成った時、自分の志を表す、自分の分身として、「欲存老蓋千年意、為覓霜根數寸栽(成長の後は車の傘のように千年も枯れない松の精神を保存したい、だからその松苗の二三寸ばかりの霜根を私のために求めて植えさせてください)」との思いで松を植えた(「憑韋少府班覓松樹子栽」0390)。

成都に戦火が及んできて、それを避け梓州にいた時、この松を気にかけて「尚念四小松、蔓草易拘纏。霜骨不堪長、永為鄰里憐(まだ思われるのはせつかく植えた四本の小松のこと、小松ははびこる草にまとわれやすい。だから霜をしのぐ骨幹も生長するのに耐えられずにあたりの人々の憐れまれて枯れてしまわないかと気がかりだ)」「寄題江外草堂」0650)と詠っている。

広徳二年(764)春、嚴武が再び成都に赴任すると聞いて、梓州から成都へ帰る時の詩には「新松恨不高千尺、惡竹應須斬萬竿(松は育ってはいいても残念ながら千尺の高さにはなっていないだろう、生えすぎた竹は一万本も切らないといけない)」「將赴成都草堂……五首」其四 0735)と、竹を切り払ってでも松を大きくしたいと述べている

草堂に帰ってみると四本の松は健在だった。「入門四松在、步履萬竹疏」(「草堂」0739)、門を入ると四本の松が残っている、歩いていくと多くの竹がまばらに生えている。

そして四本の松を主題にした詩「四松」0740にいう。「

四松初移時、大抵三尺強。別來忽三歲、離立如人長。

會看根不拔、莫計枝凋傷。幽色幸秀發、疏柯亦昂藏。

……

覽物嘆衰謝、及茲慰淒涼。清風為我起、灑面若微霜。

足為送老資、聊待偃蓋張。我生無根蒂、配爾亦茫茫。

有情且賦詩、事跡可兩忘。勿矜千載後、慘澹蟠穹蒼。

四本の松を初めて草堂に移植した時には、大体三尺の長さだった。別れて以来あっというまに三年が過ぎ、今ではそれぞれ人の背丈くらいになって日本ずつ並んで立っている。根っこは抜けていないだろうが、枝が凋み傷んでいても仕方がないと思っていた。しかし幸いにその奥深い色は際だって輝いているし、まばらになった枝

も勢いよく上に伸びている。

……

今まで草堂の色んな物が荒れ果てるのを見ては嘆いてきたが、四本の松の前に来ると寂しさが慰められる。清らかな風が私のために吹き起こり、顔に薄い霜のようにひんやりと降り注ぐ。将来、老いを送る拠り所になってくれるだろうが、しばらくは枝葉を張って大きな覆いになるのを待つことにしよう。それにしても私の人生は根無し草だ、お前たちのお伴をするにしても未来は何と茫茫として不確かなことか。それで思っていることをまあちょっと詩に詠ってみた。これで大地に根を張ったお前たちのことも、今まで危ない道を歩んできた私のことも両方忘れて、憂さを晴らすことができる。お前たちは千年の後には伸び広がった枝を大空に静かにたたなわせているだろうが、それを今から誇ってはいけないぞ。

杜甫は元気に育っている松を見て、漂泊の悲しみをやわらげ、さらに成長する松を思っただけで楽しくなっている。松もまた杜甫を元気づけ再生させてくれる良き友だったのだ。

枏はこの樹があるからその傍に草堂を建てた。杜甫はこの樹のこんもりした翳りを愛し、根元に寝転んで酔いをさました（「高枏」0467）。それが暴風雨のために根こそぎ倒れた時、これからどこで詩を吟じたらいいのかと激しく悲嘆している（「枏樹為風雨所拔歎」0486）。

白居易も草花が大好きである。牡丹・蓮・桃・桜桃・山石榴・薔薇・山枇杷・紫薇花（さるすべりの花）・木蓮・杏・梅など、さまざまな花に対して深い思いを歌っている。花を歌った詩は数えきれず、毎年、それぞれの季節に花への思いが歌われている。その思いの深さが分かる詩を二三挙げよう。

「下邳莊南桃花（下邳莊南の桃花）」0630

村南無限桃花發、唯我多情獨自來。日暮風吹紅滿地、無人解惜為誰開。

下邳村の南には見渡す限り桃の花が咲いている、私だけが多情で一人やって来た。日暮れに風が吹いて落花が散り敷いているのに、それを惜しむ人もいない、花はいったい誰の為に開いたのか。

貞元二十年（804）、任官前、母の喪に服している下邳での作である。白居易は、その美しさにみとれつつ、桃の花の気持ちになって、美しさを愛してくれる人が他にい

ないのを残念がっている。

「玉泉寺南三里澗下多深紅躑躅繁豔殊常感惜題詩以示遊者(玉泉寺の南三里、澗下に深紅の躑躅多し。繁豔常に殊なる。感じ惜しみて詩を題し以て遊ぶ者に示す)」3129

玉泉南澗花奇怪、不似花叢似火堆。今日多情唯我到、每年無故為誰開。
寧辭辛苦行三里、更與留連飲兩杯。猶有一般辜負事、不將歌舞管弦來。

玉泉寺の南の谷川に咲く花はめずらしくて、花というよりそのいっぱい咲いているのはまるで火のかたまりのようだ。今日、私はこの花が大好きで独りでやってきた、毎年変わることなく誰に見てもらおうとして開くのか。この花の可愛いことを思えば三里の距離くらいなんでもない、もっといっしょにいて二三杯飲もうじゃないか。すまないね、歌舞管弦の用意をしてこなかった。

大和八年(834)の春、白居易、六十三歳、洛陽に在って、太子賓客に任ぜられている時の作。「玉泉寺」は、洛陽の東南の玉泉山にある。玉泉寺を南に三里行った谷あいの川のほとりに深紅のつつじがいっぱい咲いているのに、それが辺鄙なところであって皆の目に触れないのを残念に思い、つつじに代わって皆に宣伝するために作ったのがこの詩である。つつじに対して、音楽の伴奏つきで楽しめなくてごめんねといている。つつじが恋人のようだ。これはほんの一例にすぎない。白居易の擬人化は、単なる擬人化を超えて、愛着あるものの全てが人間と同じように生きた愛の対象となる。

「游趙村杏花(游趙村の杏花)」3619

趙村紅杏毎年開、十五年來看幾迴。七十三人難再到、今春來是別花來。

游村の赤い杏は毎年開く、十五年来 何度これを見に来たろう。七十三の人は再びやってくることはむつかしい、今日春の一日 ここに来たのは花にお別れをいいにやってきたんだよ。

白居易七十三歳、会昌四年(844)春の作。「十五年来」というのは、大和三年(八二九)三月末、百日の假満ちて刑部侍郎を罷め、太子賓客を以て東都に分司して以後の洛陽での歳月を指す。白居易は、この一年半後、七十五歳で亡くなる。この詩の表現は単純だが、この単純平明には容易に至りがたい。白居易の詩を読み続けてここに至った時、読者はこの詩の澄みきった心境に感慨を覚えずにはおれないだろう。

白居易は花ばかりではなく竹を大変好んだ。「池上篇」序によると、履道里の邸宅の面積の九分の一が竹林で、千本もの竹が植えられていた。竹を詠じた詩はたくさんあって、それをずっと読んでいくと、貞節堅固な君子のイメージをはじめとして、白居

易の一生の各時期での考え方や感情がよくわかるのだがそれは割愛する。

こうして、白居易の愛情は、美しい愛らしいもの、愛着あるもの全てに向っていく。

「別春爐(春爐に別る)」2395

暖閣春初入、温爐興稍闌。晚風猶冷在、夜火且留看。

獨宿相依久、多情欲別難。誰能共天語、長遣四時寒。

宮中のいろりを設けた部屋に春がやってきた、いろりもそろそろ盛りが過ぎたようだ。しかし夕方はまだ風が冷たいので、夜にはいろりに火を入れる。宿直のときには他に人もおらずずっとおまえとなかよくしてきた、おまえへの情が深くて別れるのがつらい。だれか天と相談して、一年中寒いようにしてくれないものか。

これは宝暦元年(825)、白居易五十四歳、洛陽で太子左庶子を務めている時の作。春がやってきて、長く親しんだいろり(火鉢)と別れねばならない寂しさを詠じている。白居易の「多情」は、花や自然や季節だけでなく、無生物に対しても示される。それは杜甫も同じである。このこと、第二章、無生物の擬人化の節でまた述べよう。

二 山水に遊び景物を愛でる喜び

杜甫は山水を深く愛した。彼は叙景詩人としても超一流である。行く先々でその土地の山水・景色を描出している。街中でも宴の地やその周囲の風景を常に描いている。

杜甫の叙景の特徴は以下の諸点にある。

1、叙景のアイテムが多様である。

例えば、「今秋乃淫雨、仲月來寒風。羣木水光下、萬家雲氣中(今年の秋は長雨が続いて、八月にも寒風が吹いてくる。多くの樹木の影が水面の光の揺らめきに映り、人家は雲気の中に霞んでいる)」「(「苦雨奉寄隴西公兼呈王徵士」0108)は、この四句中に、雨・風・樹木・水面・光・雲気が登場して、一幅の秋の叙景画のようだ。

2、景物自体を捉えて描写しており、詩人の感情からの独立度が高い。

例えば「倦夜」0782。

竹涼侵臥内、野月滿庭隅。重露成涓滴、稀星乍有無。

暗飛螢自照、水宿鳥相呼。萬事干戈裏、空悲清夜徂。

竹林の涼しさが寝床にまで入ってくる、野を照らす月の光がくまなく庭の隅にまで差している。露が凝って重く^レ墜^レになって落ち、まばらな星の光は見えたり消えたりしている。螢は闇の中を飛んで自分を照らし、鳥は水辺に宿

って呼び交わしている。万事は戦乱の中にある、この清らかな夜が過ぎてゆくのを空しく悲しむ。

水・光・竹・露・星・蛍・鳥等、多くの景物が登場している。そして、この詩は、対象である景物自体を捉えて描写しているという点で、杜甫の叙景の特徴をよく示す。王維や孟浩然の叙景詩では詩人の情と景とがもっと密着している。⁸

3、 杜甫は、壮大な天地を骨太に描くことに長ずる。例えば「客居」0863の冒頭。「客居所居堂、前江後山根。下壑萬尋岸、蒼濤鬱飛翻(旅中の仮住まいは目の前を長江が流れ、後ろに山麓が迫っている。下方にはとてつもなく高い崖が切り立ち、川面には蒼い波が翻っている)」。また「登岳陽樓」1363のように。

4、だが一方で繊細な叙景にも秀れている。中でも光と水の描写は素晴らしい。モネは光の画家といわれる。これに習えば、杜甫は「水と光の詩人」といい。

「晦日尋崔戢李封」0138に「朝光入甕牖、尸寢驚敝裘。起行視天宇、春氣漸和柔(粗末な家の窓に朝日がさしこんできた、死んだように寝ていた私はぼろぼろの服の中で目を覚ました。起きて歩きながら空を見ると、春の陽気がふわふわと感ぜられる)」という。春の朝の光とその陽気を実感させる。

「遣懷」0317に「水靜樓陰直、山昏塞日斜(水は静かにたたえられていて城樓の影がまっすぐに映っており、山は暗くなって塞を照らす太陽が西に傾きかかっている)」というのは、秋の夕暮れの寂寥をしみじみ感じさせる。

「萬丈潭」0371に「削成根虛無、倒影垂澹澗。黑知灣濃底、清見光炯碎(削られた岸壁は水中から姿を突き出し、逆さまに映る影が水面で揺れている。黒いのは水が集まって底までが深いのだし、澄んだ水面には光が砕けるようにきらきらしている)」という。杜甫は水面に映る景物をしばしば描いている。水面に光が砕けきらめく描写も見事だ。

「晚晴」0466に「村晚驚風度、庭幽過雨霑。夕陽薰細草、江色映疏簾(村が暮れかけて強い風が吹いてきた、庭は静かに通り雨に潤された。夕日が細かな草を薫らせ、川の水の色が目の粗い簾に映える)」というのも、雨後の夕陽に照らされて香る草、夕陽が作り出す水面の碧が簾に映るといふ、微妙な景を描き出している。

「梔子」0523(宝応元年、成都)に「紅取風霜實、青看雨露柯。無情移得汝、貴在映江波(風霜の秋に結ぶ実は赤く、春の雨露に枝が濡れそぼつ頃は青が見事だ。こんなに優れたお前だが他所に移しかえるつもりはない、川面に映えるその美しさが大切なことから)」という。浣花溪の川べりの梔子を詠じたもの。実が熟していない時の青、熟せば種は赤い、その色が川面に映る美しさがたまらない。光と水の芸術だ。

⁸ 日本語では、「葦牙ジャーナル」128(2017.2)収載「杜甫の詩の魅力四」【山水への愛】に比較的詳しく述べた。中国語では、《杜甫的独善》(《首届詩聖杜甫與中華詩學國際學術研討會論文集》、2018.4)に。

「旅夜書懷」0836 に、平原と大江を照らす星と月の光を詠じて「星垂平野闊、月湧大江流（広がる野原に星の光が垂れ下がり、大江の流れる上に月の光が湧いてくる）」という。荘厳な雰囲気を持つ情景である。

「船下夔州郭宿雨濕不得上岸別王十二判官」0870 に、浅瀬に照る月光を詠じて「依沙宿舸船、石瀨月娟娟（乗っている大きな船は砂原の側に泊まっている、石の多い浅瀬には月の光がきらきら揺れ動いている）」というのは、上の荘厳な月光とはちがう微細なきらめきである。

杜甫の光の描写は微細で動きのあるものが多い。王維や孟浩然も光を描写するが、このように微細な描写は杜甫が最も得意である。

成都の草堂で、朝から昼にかけての、光と雨を捉えた作。「晨雨」1114。

小雨晨光内、初來葉上聞。霧交纔灑地、風折旋隨雲。

暫起柴荆色、輕霑鳥獸羣。麝香山一半、亭午未全分。

まだ朝陽のさしている時に小雨が降りだした、木の葉に雨の当たる音が聞こえる。それが霧と交わって地面に注ぎ、風に吹かれて向きを変え雲の後についてゆく。そまつな草堂も潤って色が鮮やかとなり、鳥獸の群れも少し潤おされている。麝香山は半分だけ姿を現して、昼になってもまだはっきりとは見えない。

光・雨・霧・風・雲、これに潤される草堂と鳥獸、同じく潤おされる杜甫、これらが全て登場している。そして、微細で、動きがある。

5、杜甫には雨を詠じた詩が多い。詩題に雨を含むものだけで60首余りある。

雨はおおむね杜甫を元気づけている。成都での作「江漲」0464は、雨で錦江の水が漲ったことを詠い、「朝雨」0465は暁に雨が降った時の爽やかな景を、「晚晴」0466は夜になって晴れたことを詠じる。「江漲」では江の水の漲るエネルギーが杜甫を元気づけ、帆を飛ばして仙境に行くのだという。夔州でも雨を喜ぶ作は多い（「雨」0915～「雨二首其二」0918他）。

白居易も叙景詩人として多くの名篇を残している。彼が描いた叙景の名篇の数々のうち、杭州と蘇州の作から一首ずつを挙げておく。

「春題湖上（春湖上に題す）」2331

湖上春來似畫圖、亂峰圍繞水平鋪。松排山面千重翠、月點波心一顆珠。

碧毯線頭抽早稻、青羅裙帶展新蒲。未能拋得杭州去、一半句留是此湖。

西湖に春がやってくればまるで絵に描いたよう、さまざまな高さや姿の山の峰が西湖をかこみ水面は平らかだ。松が山腹に生えていてうっそうたる緑色、月が湖面の波の間に映ってまるで一粒の真珠のようだ。(湖のほとりには)青緑の毛氈の毛の先のように早稲が頭を出し、青いうすぎぬのスカートのひものようにがまが芽吹いている。まだ杭州を投げ捨てて去っていくことができない、その半ばはこの湖が私を引き留めているのだ。

長慶四年(824)の作。絵のように美しいとは、今の私たちが、実際の景色の美しさをいうときによく使う表現だが、この詩はまさにその言葉を思い出させる。西湖の絵のような美しさを描き出そうとして、構図の面でも、色彩の面でも、丁寧な工夫が見られる。「乱峰」が湖を「圍繞」するとは、湖に在ってまわりの全体をみわたしたありさまで、西湖をとりまく遠景が目につかぶ。かと思えば、波間に映る月が、真珠のようだと、ごく微細な景を描きだして、視野を変え、焦点を移動させ、まるでカメラのズームと接写を活用して撮影したようだ。

「小舫」0458

小舫一艘新造了、輕装梁柱卑安篷。深坊静岸遊応遍、浅水低橋去尽通。
黄柳影籠随棹月、白蘋香起打頭風。慢牽欲傍櫻桃泊、借問誰家花最紅。

小舟を一艘新しく造って、梁柱を軽く装い屋根を低く葺いた。奥深い街も静かな岸もどこだって行くことができる、浅い水も低い橋の下もどこでも通れる。水面の新芽の生えた柳の影に棹につれそう月がとりこまれている、白いうきぐさの香がただよい 頬を打つ風が起こる。ゆるやかに舟を牽いて桜桃の花の下に碇泊しようと思うが、どの家のが一番紅くて美しいだろう。

一・二句、蘇州を楽しむために、自分で小舟を造ったことを歌っている。蘇州は細い運河が網の目のように発達している。小舟があれば、蘇州の街のどこにでも行くことができる。対句の三・四句、運河の通る蘇州の町並みを大きく描写し、五・六句は、水面の細かな情景を歌っている。杭州の「春題湖上」でも見せていた白楽天得意の手法である。夜の河を行く舟の櫓の音が聞こえ、岸辺の香りが伝わってくるようだ。

なお、白居易は雨が嫌いである。「效陶潜體詩十六首(陶潜体に效う十六首)」序0212に「余退居渭上、杜門不出。時屬多雨、無以自娛(私は渭上に退居し、門を閉じて外に出ない。ちょうど雨の多い時季で、楽しむ事が何もない)」といい、「夜雨有念」0485に「以道治心氣、終歲得晏然。何乃戚戚意、忽來風雨天仏道で心を治めれば、一年中

安らかなもの。なんだって心がこんなに憂いに満ちるのか、突然夜空が風雨になってしまった」といい、「陰雨」1140に「望闕雲遮眼、思郷雨滴心(長安の宮廷の方を望んでも雲に遮られて見えず、故郷を思えば雨が胸にしたたり落ちる)」という。前二者は元和8、9年、下邳で服喪中の作、後者は元和14年、忠州での作。心が沈み憂鬱になるのはそれぞれ原因がある。雨はさらにそれを強める役割を果たしている。

三 飲食の喜び

【食べる喜び】

杜甫は、食べ物の形や色、食事のシーンをありありと表現した中国で初めての詩人である。⁹例えば「茅堂収稲を檢校す二首」其二 1221は、ふっくらと炊いた白いご飯の美しさ・うまさを見事に表現していて唾が出そうだ。

稻米炊能白、秋葵煮復新。誰云滑易飽、老藉軟俱勻。

種幸房州熟、苗同伊闕春。無勞映渠碗、自有色如銀。

稲の米は炊くとまっ白だし、秋葵は取れたてのものを煮る。葵は滑らかで食べやすいからすぐに飽きてしまうなどと誰がいうのか、年を取るとご飯の一粒一粒が軟らかいのはありがたい。米の種は幸いにも房州の成熟したのと同じだし、苗は故郷近くの伊闕で春植え付けするのと同じだ。輝くシャコのお椀に盛るまでもなく、米そのものが銀色に輝いている。

杜甫はただ生理的な欲求や満足を文字にしたのではない。

「加餐可扶老、倉廩慰飄蓬(腹一杯この飯を食べば老体を養えるし、倉に米が満ちていると風に翻る蓬のような漂泊の身を慰めてくれる)」「暫往白帝復還東屯」1219)、「御袂侵寒氣、嘗新破旅顏(裏地つきの服を着ても寒気が襲うが、新米を食べると旅愁に沈む顔がほころぶ)」「茅堂檢校收稻二首」其 1220) というように、炊きたてのご飯を食べることが漂泊の悲哀を忘れ喜びを与えてくれることを自覚している。それを表現することで杜甫は日々再生し続けたのである。

白居易も食べる喜びを多数詠じている。杜甫を意識したと思われる作を挙げておこう。

⁹ 後藤秋正「杜甫の食事」を参照。

「烹葵」0308にいう。「昨臥不夕食、今起乃朝飢。貧廚何所有、炊稻烹秋葵。紅粒香復軟、綠英滑且肥。飢來止於飽、飽後復何思(昨日は寝ていて夕飯を食わなかったので、朝起きると大分腹が減っていた。お勝手が貧相で何もないから、米の飯に葵を煮て食べることにした。薄紅色の飯は香りがよく、緑色の葵の葉は滑らかで肥えている。腹が減ったらいっぱい食べ、いっぱいになれば何の気にかかることもない)」。この詩は杜甫の上掲詩を頭において詠じている。ご飯の香りとなめらかで肉厚の葵の葉の味わいが白居易の貶謫の憂いを吹き飛ばしている。

杜詩「佐還山後寄三首(佐の山に還りて後寄す三首)」其二 0340に「老人他日愛、正想滑流匙(老いた私は日頃から粟の飯が好きで、粟の粒が滑らかに匙から流れしたたるさまを今思い浮かべている)」とあり、「江閣臥病走筆寄呈崔盧兩侍御(江閣にて病に臥し筆を走らせて崔盧の兩侍御に寄呈す)」1399にも「滑憶彫胡飯、香聞錦帶羹。溜匙兼煖腹、誰欲致杯罍(滑らかなものでは真菰の実の入ったご飯を今も覚えている、芳しい香りのは蕁菜のこってりしたスープだ。匙にすべる真菰と蕁菜に加えて酒もほしい、どなたか杯と酒瓶を届けてくれないものですかねえ)」とあって、飯が匙に滑らかに流れる質感・食感がいかにも食欲を誘う。これを承けたのが、白詩「殘酌晚餐」3240に「魚香肥潑火、飯細滑流匙(魚は肥えて膏が火に注ぎ、飯は滑らかに匙を流れる)」である。¹⁰

【飲酒の喜び】

杜甫は酒が心底好きである。左拾遺として長安に在る時の作「曲江二首」其二 0208に、「朝回日日典春衣、每日江頭盡醉歸。酒債尋常行處有、人生七十古來稀(毎日朝廷から退出すると春着を質に入れて、曲江のほとりで酔っぱらってから家に帰る。酒代の借りはあたりまえのことで行く先々にあっという間にいいけれど、古来七十まで生きた人はめったにない)」という。朝廷の勤務を終えると、毎日着物を質に入れて、曲江池のほとりで酔いを尽くしていたのである。

¹⁰ この継承関係については、澤崎久和氏にご指教いただいた。氏に拠れば、全唐詩に、掬った匙に飯が滑らかだとうたう詩は杜甫と白居易にしかない、食材や調理・調味をうたうのみならず、食感の描写に意を用いるのは白居易だが、それには杜甫の詩に影響を受けた点があると思われる、とのことである。

大暦二年秋の作「登高」1213(全詩は後掲)は「艱難苦恨繁霜鬢、潦倒新停濁酒杯(悲しいことにあいつぐ難儀のために鬢の毛は霜のようにまっしろとなった、ちかごろ病気のために濁り酒を飲むのをやめたので、いよいよ投げやりな気持ちになってしまう)」と、医者から酒を禁じられたことを怨んでいる。¹¹原因は持病の糖尿だろう。だが、まもなくこの年の冬には恐る恐る飲み出し、以後けっこう酒量が多そうな時もある。医者 of 言うことを聴いていたのは晩秋から冬にかけての一時だけである。

杜甫の酒の詩を読んでいると、杜甫独特の酒のシーンといえるものが幾つかある。

1、酒と詩がしょっちゅうセットで登場する。少なくとも20数例を認める。幾つかの例を挙げておこう。「醉裏從為客、詩成覺有神(醉裏客と為るに^{まか}從せ、詩成りて神有るを覺ゆ)」「獨酌成詩」0181)、寛心應是酒、遣興莫過詩(心を^{ひろ}寛くするは^{まさ}応に是れ酒なるべし、興を^や遣るは詩に過ぐるは莫し)」「可惜」0453)、「把酒從衣濕、吟詩信杖扶(酒を把りて衣の^{まか}濕るに從せ、詩を吟じて杖の扶くるに信す)」「徐歩」0455)、「尚憐詩警策、猶記酒顛狂(尚お憐む詩の警策、猶お記す酒の顛狂)」「戲題寄上漢中王三首」其三0581)、「道消詩發興、心息酒為徒(道消して詩は興を^{まか}発し、心息わんとして酒を徒と為す)」「哭台州鄭司戶蘇少監」0795)、「敝廬遣興奉寄嚴公」0805「把酒宜深酌、題詩好細論(酒を把らば宜しく深く酌むべし、詩を題して好しく細かに論ぜん)」等々。

この酒と詩(詩と酒)がペアの表現が、実は中国の詩において杜甫に初めて見える。先秦漢魏六朝、そして唐においても「詩酒」の語は見え、曹操「短歌行」の「對酒當歌」、庾信「對酒歌」の「琴從綠珠借、酒就文君取」のように酒と歌が共に登場する詩はあっても、詩と酒を対句にすることは稀であり、かつそれは詩人自身にとっての詩

¹¹ 清・楊倫『杜詩鏡銓』卷七に「時に公肺疾を以て飲を断つ」。一説には、胸中にこみあげてくる深い憂愁のため、気づかぬうちに杯を置いたと解する。例えば、戸崎允明『箋注唐詩選』は、胸中にこみあげてくる深い憂愁のために、気づかぬうちに杯を置いたことをいうとする。同年重陽の作「九日五首」其一〔一二〇九〕に「重陽獨り酌む杯中の酒、病を抱き起ちて登る江上の台」とあり、酒を飲んでいるので、この説も有力。私は、吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』(1952初版、1964.9、29刷)を高校の二年生の時あたりに読んで、その印象が余りに強い。ここでは吉川先生の説に従っておく。七律の項で詩の全句を挙げて賞味する。

と酒とを表現したものではない。

李白に詩と酒の対句が二例ある。「賦詩旃檀閣、縦酒鸚鵡洲(詩を賦す旃檀閣、酒を縦にす鸚鵡洲)」「(贈僧行融)」、「八月枚乘筆、三吳張翰杯(八月枚乗の筆、三吳張翰の杯)」「(送友人尋越中山水)」がそれだが、いずれも、詩を送る相手の人柄を表現するもので自分のことではない。酒と詩との対句は杜甫において、初めて詩人自身の日常、その生活と感情の表現として成熟し大量に詠じられたのである。

それを引き継いだのは白居易である。例えば「取興或寄酒、放情不過詩(興を取るは或いは酒に寄せ、情を放にするは詩に過ぎず)」「(移家入新宅」0381)、「林間暖酒燒紅葉、石上題詩掃綠苔(林間に酒を暖めんとて紅葉を焼き、石上に詩を題さんとて緑苔を掃う)」「(送王十八歸山寄題仙遊寺」0715)のように。白居易には七十例を超える詩と酒の対句が見え、その多くが詩人自身の日常の生活と感情を表現している。白居易が日記のように詩を制作したのは周知の事だが、杜甫もそうなのである。杜甫にとっては詩を詠じると同じく酒も日常だったのであり、それを反映したのが詩と酒の対句表現なのである。

2、自分で醸造して楽しんでいる。「羌村三首」其二 0186 では、「頼知禾黍收、已覺糟床注(ありがたいことにイネやキビは収穫を終えた、もう酒搾りから酒が滴る様子が目に浮かぶ)」と喜んでいる。「帰來」0738 でも、「洗杓斟新醞、低頭拭小盤(ひしゃくを洗って新しく醸した酒をつぎ、酒の肴を入れるために頭を垂れて小皿のホコリを拭う)」と、久しぶりに草堂に帰ってまず思いつくのは酒を醸造することである。

3、わかい時から酔うと舞う癖がある。幾つかの例を挙げておく。

「魏將軍歌」0126 にいう。「吾為子起歌都護、酒闌插劍肝膽露(私は君のために立ち上がって「丁都護歌」を唱う、そして酒の喜びも終わる頃、舞の劍を鞘に収めて心中の全てを露わにする)」。天寶末年の作、劍舞を舞っている。

「九日楊奉先會白水崔明府(九日楊奉先白水崔明府を會す」0128。「晚酣留客舞、鳧鳥共差池(夕方になっても宴は止まず主人が客を引き留めて舞わせるので、鳧形の鞋が主客一緒に入り乱れる)」。天寶十四載、四十四歳の作。主人と客の喜びとが一つになつての華やぎと快い気分が伝わる。

「題鄭十八著作丈故居(鄭十八著作丈が故居に題す)」0220、乾元二年(759)季春、左遷された年長の友人鄭虔を思つての作。「酒酣懶舞誰相拽、詩罷能吟不復聽(昔は酒たけなわとなれば舞つたものだが君がいないから懶い、詩ができれば吟じるけれども聴

いてくれる人がいない)」。

年を取ってからも、酔えば舞う癖はなおらない。「台上得涼字(台上、涼字を得たり)」0652。「老去一杯足、誰憐屢舞長(老いたので酒は一杯で十分だ、この親父が長々と舞出すのを誰が愛して見てくれよう)」。広徳元年(763)夏、五十二歳、東川節度使の留後章彝しょういが開いた酒宴での作。「酒は一杯で十分」というのが寂しい。誰も見てくれそうもないのに踊りたくなっている。¹²恐らく踊ったのだろう。

さらに2、3の例を挙げておく。「醉従趙女舞、歌鼓秦人盆(酔って美女に習って舞い、甕を叩いて拍子を取りながら歌う)」(「貽華陽柳少府」0912、大暦元年[766])。「哀歌時自短、醉舞為誰醒(時おり悲しい歌を歌って自分を憐れみ、誰を気にするでもなく酔って舞う)」(「暮春題瀼西新賃草屋五首」其三1086)。「歡劇提攜如意舞、喜多行坐白頭吟(お前が近くに來たのがとても嬉しい、手をつないで王戎の如意の舞を舞いたい、喜びのあまり歩いてもすわっても「白頭吟」を歌う)」(「舍弟觀赴藍田取妻子到江陵喜寄三首」其二1279、大暦二年冬)。

四 画を見る喜び

杜甫は釣りや囲碁など、今でいえば趣味に属する様々なことに喜びを見出している。その筆頭は画を見る喜びであり、馬・鷹・山水の画等を詠じたものがある。

宝応元年(762)、綿州での作「姜楚公画角鷹歌(姜楚公の画ける角鷹の歌)」0565。この詩に描かれる鷹は本物を圧倒する気迫で、今にも眼前に飛び立ちそうだ。

楚公畫鷹鷹戴角、殺氣森森到幽朔。觀者貪愁掣臂飛、畫師不是無心學。
此鷹寫真在左綿、卻嗟真骨遂虛傳。梁間燕雀休驚怕、亦未搏空上九天。

楚公が画いた鷹は角毛をいただいており、殺伐とした陰の気が満ちて北国に脚を踏み入れたようだ。見るものはもしや鷹が臂から飛び立つのではないかとひどく気をもみ、画師は誰もがこのような画を描きたいと思うのだ。この鷹が本物そのままに画かれて綿州にいるので、鷹の実物は画に圧倒されて名ばかりが伝えられるありさまだ。梁りやうのあたりの燕や雀たち驚き恐れることはないぞ、この鷹が飛び上がって空に舞い上がるわけではない。

鷹以外に、馬では「天育驃の図の歌」0124(天宝末年)、山水では「王宰が画ける山

¹² 鈴木虎雄の解に従う。

水の図に戯れに題する歌」0409(上元元年)等を、画を見て詠じた代表的な作として挙げるができる。

このように画に即して詠われた詩を「題画詩」という。題画詩は杜甫においてジャンルとして成立した。¹³ 題画詩は、宋代、画の種類においても、量においてもさらに発展を遂げる。しかし、眼前に躍動し、画から飛び出してくるこの迫力において、杜甫を超える作はまずないだろう。

白居易も絵畫は大好きだった。¹⁴白居易自身、絵畫は「予天与好事(私の天が与えてくれた愛するもの)」(「画竹歌并引」0594)という。白居易は、自己の肖像画を何度も画かせているが、うち二度は李放という画家に描かせている。その李放がわかい頃に描いてくれた肖像画を、白居易は地方の任地にあっても絶えず持参していた。白居易はまた母丘元志の「木蓮図」、杜宗敬の「西方世界」等、多くの絵を画工に命じて描かせた。彼はまた詩文の題材とした事柄を絵畫にし、人に伝えることに熱心だった。例えば、杭州詩史の時の作「江樓晚眺景物鮮奇吟玩成篇寄水部張員外(夕方江楼の上から景色がすばらしいのを眺めてこの詩を作り、水部員外郎張籍に送った)」1378にいう。

澹煙疏雨間斜陽、江色鮮明海氣涼。蜃散雲收破樓閣、虹殘水照斷橋梁。

風翻白浪花千片、雁點青天字一行。好著丹青圖畫取、題詩寄與水曹郎。

あわくたちのぼるもやと小雨に夕陽の光があふれ、湖の色が鮮やかとなり湖上から吹いてくる風が涼しい。雲が無くなって蜃気楼は消え、虹の橋が輝く湖面に消えかけている。風が白浪をひるがえして無数の花となって飛び散り、雁が一行で青空を飛んでいくのが一行の文字のようだ。よし、絵の具でもってこれを写し取り、詩をそこにつけて水部員外郎の張籍君に送ろう。

第七句の「取」は、「図写」という動作を意志的に際立たせる。白居易は事実、この風景を画工に描かせ、詩とともに張籍に寄せていた。

白居易自身が絵筆を取った形跡はない。しかし、白居易は、風景であれ、動植物であれ人物であれ、それら自身が表現されるにふさわしい表現方法によって様々に表現されてよいと、考えていた。いわば表現方法の多様性を平等に認める立場に立っていた。宋代の詩論あるいは画論に起こる「詩画一如」「宛然在目」の論は、白居易のこの

¹³ 清・沈徳潜『説詩碎語』。高木正一『六朝唐詩論考』[創文社、一九九九]三一四「杜甫の馬・鷹の詩について」をも参照。

¹⁴ 以下、白居易の絵画愛好については、澤崎久和『白居易詩研究』(研文出版、2013)第三章「白居易と絵画」を参照した。

多様な表現を追求するところに一つの淵源があるだろう。

五 兼済と対立する憧憬—東遊と仙道・仏教

杜甫の志の主軸は終生、兼済＝朝臣として経世済民に尽くすことにあった。だが、彼はこれと対立して東遊の願いと仙道・仏教への憧憬を抱き続けた。

1 東遊

杜甫は二十歳代の前半に呉越を遊歴している。この呉越、今の江南地方への遊歴は、杜甫一生の甘美な思い出であり、いま一度江南に遊びたい、あるいは江南で命を終えたいとの願いを持ち続けた。

例えば「陪鄭廣文遊何將軍山林十首(鄭広文に陪し何將軍の山林に遊ぶ十首)」其二 0069(天宝十一載[752]か十二載の作)にいう。「鮮鯽銀絲鱸、香芹碧澗羹。翻疑舵樓底、晚飯越中行([何將軍は]風吹く淵で採れた新鮮なフナで銀の糸のようなナマスを作り、翠の谷川の産物であるセリの汁をご馳走してくださる。ここにいるとなんだか昔浙江を旅行してそこで晩飯を食べたときのように思われる)。何將軍の山林の邸宅を訪問した時のもてなしのありがたさと心地よさが、わかい頃浙江に旅した時の船中での晩ご飯を思い出させている。

大暦元年(766)、夔州での七絶「解悶十二首(悶を解く十二首)」其二 [1000] に、揚州に行く商人に語りかけていう。「為問淮南米貴賤、老夫乘興欲東遊(あちらに着いたら聞いてくれ、淮南の米の値段は今いくらかと、老いぼれは気の向くままに呉越に遊びに行きたい)」。

白居易が意識したかどうか確言はできないが、美しい類似がある。「池上小宴問程秀才(池上に小宴して程秀才に問う)」2841。大和四年(830)、太子賓客分司として洛陽に在る時の作。

洛下林園好自知、江南景物闌相隨。淨淘紅粒・香飯、薄切紫鱗烹水葵。

雨滴篷聲青雀舫、浪搖花影白蓮池。停杯一問蘇州客、何似吳松江上時。

洛陽の林園の景勝はよく知っている、江南の風景もいまなおおぼろげに心にある。清らかに紅い粒を淘いで香りのいい飯を炊き、紫の鱗の魚を薄く切って水葵と煮た。舟の篷とまに雨の滴る音も快く、白蓮の咲き乱れる池に浪に揺れる花の影が美しい。杯を停めて蘇州からの客である君に尋ねる、この洛陽池上の景色は吳松江上の景色に比べて、どちらが勝っているのだろう。

白居易は、宝曆元年（825）、蘇州に刺史として赴任し、ほぼ一年半蘇州で過ごしている。その時の甘美な日々が食と共に甦っている。もてなされるのと、もてなすのとの違いはあるが、いずれも食事のうまさから江南を思い、舟が登場する点も似ている。白居易、杜甫の喜びを思いつつ、この詩を作ったのではないだろうか。

再び江南に行くことは、仙道・仏教の追求とならんで、兼済に対立しつつ、杜甫が生涯抱き続けた願望だった。だが人生の最後、「東遊」の現実性は消えて、北帰と「南征」の間で、杜甫は激しく葛藤し続けることになる。

2 仏教と仙道

杜甫は、生涯、朝臣であることを生きがいとした。成都で工部員外郎に任じられると、杜甫は就任のために、水路による北帰をめざす。だが、最後の最後に至り、杜甫は南方衡陽への旅、南征を敢行する。

それは杜甫が朝臣としてのアイデンティティに執着する一方で、仏教と仙道への憧憬をわかい時から一貫して持っていたからである。彼は、戦乱と病気のために北帰が難しく余命わずかだと知った時、朝臣への道＝兼済ではなく、その対極にあった願望、仏教・仙道＝独善のために、与えられた最後の時を使おうとして南征を決行したのである。

ここには、仏教と仙道への思いが深まってからの例を二、三挙げておく。

広徳元年（763）の作「涪城縣香積寺官閣」0617の尾聯にいう。「諸天合在藤蘿外、昏黑應須到上頭（仏法でいう諸天は藤や蘿の生えている森林の上の方におられるはず、その頂上には日がとっぷりと暮れたころにやっと着くだろう）」。

杜甫は脚の不自由を押して、涪江から樹木が鬱蒼と繁る急勾配の山を上り、中腹に在る香積寺官閣を訪ねている。仏法に対して強い憧憬をもっていたことがよくわかる。

翌年、嚴武が再び成都に赴任することを聞き、成都の草堂に赴く途中、「生理祇憑黄閣老、衰顔欲付紫金丹（生活は嚴武殿に頼るしかない、老衰した顔を仙薬で蘇らせた）」（「將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公五首」其四 0735）と、わかさへの渴仰・仙道への憧憬を詠じる。

杜甫は実際、閬州から成都へもどった時、「錦里殘丹竈、花溪得釣綸（ここには前のまま丹砂を精錬する竈があるし、浣花溪で釣り糸を垂れることができる）」（「贈王二十四侍御契四十韻」0745）というように、成都で丹薬を錬っていた。

大暦二年（767）秋、夔州府での作「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻（秋日夔府に懐いを詠じ、鄭監・李賓客に寄せ奉る一百韻）」1155には、仙道などあてにしない、仏法の真理に向かうのだという。「本自依迦葉、何曾藉偃佺。……晚聞多妙教、卒踐塞前愆。……幾地肅芊芊。勇猛為心極、清羸任體孱。金篋空刮眼、鏡象未離銓（私はもともと釈迦の弟子の迦葉を慕っている、どうして仙人の偃佺を頼むことがあろうか。……老年になって仏法のありがたさがわかった、教えを守って過去の罪の責めをふさぎたい。……仏典に「仏法を求める勇猛心を奮い起こせ」とある、痩せた身体も気にしない。金のへらで眼の膜を剥がして真実を見きわめようとしても、鏡の中の虚像を本物だと見間違えているようではだめだ）」。

杜甫の仏教に帰依する決意は固く、完全に仙道を否定しているようだ。しかし、この後、杜甫はまるでこうした発言を忘れたかのようである。

同じ年の作「昔遊」1247にいう。

昔謁華蓋君、深求洞宮脚。玉棺已上天、白日亦寂寞。

……

東蒙赴舊隱、尚憶同志樂。伏事董先生、於今獨蕭索。

胡為客關塞、道意久衰薄。妻子亦何人、丹砂負前諾。

雖悲髮鬢變、未憂筋力弱。杖藜望清秋、有興入廬霍。

昔、華蓋君すなわち王子喬のような道士にお目にかかろうと、神廟のある王屋山のふもとに分け入った。だが、道士はすでに棺の中の人となって登仙しており、白く輝く太陽が寂しげにあたりを照らしていた。

……

次の年には、昔、隠棲したことのある蒙山に赴いた、いまなお志を同じくした人たちとの楽しいかった日々を思う。あの頃は、董煉師に師事していたのだが、久しく先生から離れて修道しておらず、独り寂しい思いをしている。どうして夔州のような片田舎に留まり、修道の心が衰えてしまったのか。妻子が一体何だというのだ、丹薬を煉ようとする志に背いてしまった。黒髪が白髪になったのは悲しいが、まだ筋力の衰えを心配するほどではない。藜の杖をついて爽やかな秋を望むと、興が乗ったら廬山や衡山を訪れたいと思うのだ。

杜甫は天宝三載（744）梁宋・齊魯に遊び、王屋山（山西省の山）に入って、華蓋君に就いて仙道を我が物にしようとしたが、すでに亡くなっていて願

が遂げられず、董煉師に師事した。そのいきさつと、修道が続かず、我が物になっていない残念な思いを詠じている。そして遠くない将来再び廬山・衡山を訪れたいとの期待を述べている。杜甫の仙道への思いは、去年から今年へと、日ごとに強まっている。

「憶昔行」1319(後述)では、昔華蓋君に会えなかったことへの遺憾の思いと再び董煉師を訪ねて仙道を学びたいとの願望を表現している。「秋日夔府……」が強く仙道を否定するのは、實際上却って仙・佛の杜甫への影響が、両者相譲らずの関係であったことの現れだろう。

仙道への思いは、前年からこの年にかけて、仏教と入れ替わり立ち替わり杜甫の心に募っている。このように、兼済の実現の困難を感じる時、杜甫は仏教あるいは仙道に生きようとしてきたが、その思いは最後に仙道に収斂する。「憶昔行」1319に「更討衡陽董鍊師、南浮早鼓瀟湘舵(衡陽にいま居られるという董鍊師を訪ねよう、南のかた瀟水や湘水に浮かんですぐにも船舵を動かすのだ)」という。この時、かつて仙道を学んだ董煉師にいま一度学ぼうとはっきり決意し、衡陽に行くこと、南征は最終的に決まった。

生きるため、当時、衡州刺史だった韋之晋を頼ることも仙道の追求と結びついた。だが韋之晋は杜甫の到着前に潭州に転任して間もなく病没。董鍊師にも会うことはなかった。

大暦5年(770)の冬、潭州で、杜甫は人生を振り返って、「葛洪尸定解、許靖力難任。家事丹砂訣、無成涕作霖(葛洪が尸解して仙界に行ったのが疑いないように私の死も近い、許靖が転々としたような旅は私の体力では無理だ。家庭の諸事も仙薬を鍊る秘訣も、全てがうまく行かず涙が長雨のように流れ続ける)」、葛洪のように丹砂を鍊ることもできなかつたと仙道への希求が実現できなかったことを悲嘆している(「風疾舟中伏枕書懷三十六韻奉呈湖南親友」1457)。これが杜甫の絶筆である。

白居易の仏と仙とへの態度は、杜甫とは大いに異なる。

仏教について。杜甫は、仏教への憧憬を、わかい頃から抱いてはいた。その姿勢は兼済の不如意とともに次第に真剣となり、解脱を求める思いは強さを増していく。しかし、それを越えることはない。最晩年、北帰が絶望となり、死が目前に迫ってくると、杜甫の希求は仙道に収斂していく。上に述べた通りである。

白居易は、周知のように晩年は、香山居士と号して、仏教の世界に入った。その根

底にあったのは、仏教の力により長安で宰相となる未練を断ち切ることで、死後への不安・恐れを来世の存在により和らげようとするものである。齋戒による健康の維持を、仏教に接近したいま一つの理由に加えてもいい。

仙道については、白居易は、江州での仙薬を錬ることに失敗して、不老長寿はあり得ないとほぼ結論した。後、道士との応酬において、挨拶程度に仙道を認めるかの表現をすることもあるが、江州で、仙道とは関係を切ったと見ていい。

六 詩作の喜び

1、杜甫は詩人である。詩人としての自負は誰よりも強く、詩作は家業だと自負していた。天宝七載（748）、わかい頃を振り返って、「讀書破萬卷、下筆如有神。賦料揚雄敵、詩看子建親（万巻の書物をボロボロになるまで熟読し、ひとたび筆をおろすと神霊の助けを得たように詩文ができた）」（「奉贈韋左丞丈二十二韻」0035）という。成都の草堂で、錦江の水が勢いを増すのを見ての作「江上値水如海勢聊短述」0461 にいう。「為人性僻耽佳句、語不驚人死不休（生来偏屈で佳句を作ることに夢没頭し、言葉が人を驚かさなければ死んでもなお追究してやめなかった）」。杜甫は詩作に命をかけていた。

大暦元年（766）、次男宗武の十三歳の誕生日に詠じた作「宗武生日」0978 には、「詩是吾家事、人傳世上情（詩こそ我が家が代々受け継いできた事業だ、世の人々はその評判を言い伝えている）」という。杜甫の祖父杜審言は五言詩の名手として有名な詩人だった。

詩作は彼の生命である。詩人として祖父の杜審言のように後世に名を遺すことは杜甫畢生の願いだっただろう。杜甫はその偉大な詩業を永遠に世界に伝え続けている。

2、白居易にとって、詩と酒と琴は生活の伴侶でどれが欠けることも想像できない。だが、中でも詩こそは命そのもので、これを取り上げたら白居易は白居易でなくなる。酒は、齋戒の時、晩年の二十三年の半ばは飲まない日があった。琴も、開成四年に中風にかかってからは弾くのがむつかしくなってしまう。しかし、詩だけは生き延びる限り、歌い続けた。

「はじめに」で述べたが、詩作の頻度は、杜甫が白居易に勝る。杜甫と白居易は唐人の中で傑出している。他の詩人と比較しよう。

例えば韓愈は400首弱を伝えている。最初の詩が伝わる貞元二年（786）から、没年の長慶四年（834）までの39年の詩生涯として、年に10首弱の制作率である。白居易は年に60首程度だから、韓愈のほぼ6倍のペースで詩を作り続けたのである。そして、実際には、元和十年には139首を残して、この年は一ヶ月にほぼ12首を作っている。大和三年にも127首を作っていて一ヶ月にほぼ10首を作っている。多い時には、二、三日に一首が詠じられている。白居易の頭にはいつも詩句のフラグメントが飛びかっけていて一首の詩となるのを待っている状態だった。酒を味わう喜びも、雪月花を楽しむ思いも、すべてが白居易の頭では、詩句の形になっていて、外に飛び出すときを今か今かと待っていたのである。

白居易は、おりにふれ事にふれての感懐を、話すように、あるいは歌うように語りつづけた。詩は彼の命そのものだった。彼はその自分を、「詩魔」といいまた「詩狂」といった。それは、角度を変えてみれば、詩で歌われた全てのことが、官僚としての抱負や苦悩も、女性への愛の喜びと悲しみも、「琴詩酒」の楽しみも、「雪月花」の味わいも、飲食をはじめとする日常・身辺のごくささいなことがらも、生きて思い感じることのいっさいが、白居易にとっては、歌われてしかるべき価値を持っていたことを意味する。

白居易は、自らが作り続けた詩と文の全てを、白居易という人間が、生きて、行い、感じた全てのことを人に伝える価値ありと信じて、後世に残すことにすさまじいまでの執念を示している。

白居易の自己の詩文の編集活動は、江州で始まって、以後何度も行われた。編集するたびにさらによい文字を求めて書きかえた。そして、それを寺院に奉納している。寺院に奉納するのは、戦乱をかいくぐって後世に伝わる可能性が高いからである。最後の七十五巻本に至っては、これが最後だとの思いがあったのだろう。三つの寺に納め、さらに甥と外孫に文集を託している。これだけの白居易自身の執念があったからこそ、私たちは、今日、白居易の作品の大部分を見ることができる。まことに白居易は、人として生まれて味わえるすべての充実と楽しみを味わい、その楽しみを千数百年後の私たちにまで追体験させてくれている。

【悲哀の止揚、共生の思想】

上篇が終わりを迎えるここで、杜甫と白居易の共生の思想¹⁵について述べておきたい。

杜甫の詩を読み進めていくと、その悲哀に大きな変化があることに気づく。わかいつ頃には単純な不遇による悲哀であったものが、次第に社会性を帯び、天下の危難と民の苦痛を我が悲哀とするようになり、自らの悲哀をも生きとし生ける者全ての命の営みに随伴するものと観る境地を表現するようになる。それは莊嚴とっていい。

成都の草堂での作「倦夜」0782に「萬事干戈裏、空悲清夜徂(万事が戦乱のうちであり、爽やかな夜が過ぎていくのを空しく悲しむ)」という、「万事」とは自らの漂泊の生活をも含んでいる。自分の人生・生活は、蚩や鳥とともに天地万物の生きる営みの一つとしてある。「旅夜書懷」0836には、「星垂平野闊、月湧大江流(満天の星が降るように輝きどこまでも広がり、水面に浮かぶ月影を湧き上がらせるように長江は流れている)」という莊嚴な映像がある。この結句にいう。「飄飄何所似、天地一沙鷗(天地大自然の莊嚴な営為の中で、砂浜の鷗と同じように、自分の漂泊の日々はある)」。

杜甫晩年の莊嚴な境地を示す代表作としては、他に「夜」0968・「登高」1213・「登岳陽樓(岳陽樓)に登る」1363等がある。

「夜」は、大暦元年(766)、夔州での作。吉川幸次郎氏はいう。「成都を去り、今度は揚子江の上流で、詩仙の東境の夔州という町へ行きました。……そこに五十五歳から五十七歳まで、つまり死ぬ三年前までいました。そうしてその詩は、この三年の間に、最後の完成として、悲壮きわまるものとなりました」。¹⁶

¹⁵「共生」は、本来19世紀後期、ドイツの生態学界で用いられた学術用語であり、「異なる種類の生物が生活を共にする」ことを意味する。その後、生態学・進化論の発展に伴い、共生の概念には変化があった。加えて社会学・政治学・哲学等の研究者が「共生」の議論に参加することで、この概念の内容はますます複雑なものになり、多くの異なる立場が存するようになった。日本でこの概念を提唱した人物として、比較的有名なのは建築家の黒川紀章である。しかし彼の理論には、「聖域」を設けて、相互の理解の努力を遮断するという問題がある。共生の基本概念について私が主に依拠するのは哲学者の尾関周二の理論である(例えば、『現代コミュニケーションと共生・共同』、青木書店、1995)。小稿では、杜甫・白居易の作品が示す具体的な内容に即して、彼らの共生思想を考えている。

¹⁶『吉川幸次郎全集』一二「杜甫について」。その「注の一」にいう。「昭和二十三年、京都市文化局文化課の依頼によって、「杜工部集」と題してした講演の筆記が、同年十一月、やはり

露下天高秋水清、空山獨夜旅魂驚。疏燈自照孤帆宿、新月猶懸雙杵鳴。
南菊再逢人臥病、北書不至雁無情。步簷倚仗看牛斗、銀漢遙應接鳳城。

露が降り天は高く秋の川の流れは清らかに、他に誰もいない山々のなか、孤独な夜には故郷に帰る旅に出たい思いが湧き上がる。まばらに置かれた灯火は自身を照らすばかりで薄暗く、舟が一艘停泊しているのが見え、三日月が空にまだ掛かっているのに、二人で衣をたたく杵の音が響く。南方の菊に二度も逢った、病気で臥せっていたのだ、北からの便りが届かない、雁には情がない。渡り廊下で杖を頼りに「牛」と「斗」の星座を眺める、天の川は遠く長安にまで続いているにちがいない。

「登高（高きに登る）」は、大暦二年（767）、重陽の節句の日、夔州での作。

風急天高猿嘯哀、渚清沙白鳥飛迴。無邊落木蕭蕭下、不盡長江滾滾來。
萬里悲秋常作客、百年多病獨登臺。艱難苦恨繁霜鬢、潦倒新停濁酒杯。

風はビュウビュウと吹き空は高く猿が悲しげに鳴いている。渚は清く沙は白く鳥が輪を描いて飛んでいる。はてしなく木々の落ち葉はザーザーと音をたてて散り、尽きることのない長江の水はグングン沸きたつように流れてくる。故郷を去ること万里、秋を悲しみながら来る秋も来る秋も旅人のまま、生涯病に見舞われて、今日は独り高台に登る。悲しいことにあいつぐ難儀のために鬢の毛は霜のようにまっしろとなった、ちかごろ病気のために濁り酒を飲むのをやめたので、いよいよ投げやりな気持ちになってしまう。

「登岳陽樓」は、大暦三年（768）の作。

昔聞洞庭水、今上岳陽樓。吳楚東南坼、乾坤日夜浮。
親朋無一字、老病有孤舟。戎馬關山北、憑軒涕泗流。

かつて南の地には洞庭湖という大きな湖があると聞いていた、いまその湖岳陽樓に登って眺めわたす。ここ国土の東南、吳楚の地は二つに引き裂かれて大きな湖となり、天も地も昼となく夜となくその水の上に浮動している。

親戚朋友からは一字のたよりもなく、老いた病の身には一艘の舟があるだけ。関所のおかれた山々の北の地方にはいまなお戦争が続いており、高楼の関干によ

同課から公刊された「解説世界名著百選第一集」に収められたが、それに更に手を加えたものである」。

りかかれば涙が流れる。

吉川幸次郎氏のこれらの作についての解説を挙げよう。氏が「人間の生命力」「人類の生命力」といわれるものを、「万物の生命力」に置き換えて読んでいただきたい。

「かく杜甫の晩年は更に悲壮なものとなりましたが、その悲壮さは秦州時代の憂鬱さとは違っています。秦州の杜甫は、ただ尖鋭に自己の憂愁のみを訴えるのに急でしたが、晩年の杜甫は、津津と湧いて出る自己の憂愁、その憂愁の底に、人間の生命力というものを認めたようです。人類の生命力は無限であって、永遠に持続する。……そうした無限の持続の一つとして人間の憂愁もあり、そのまた一つとして自分の憂愁もあるというような思想、思想とっていい過ぎならば感情が、杜甫に感得されたと、私は思います」（『吉川幸次郎全集』一二「杜甫について」）。

杜甫は、哀歎に満ちた多くの経験を重ねる中でこの荘厳な精神に到達した。それは彼がわかい時から持っていた共生の思想が行きついた所に生まれたものである。

兼濟は、その根底に当然、兼濟の思想がある。だが上に見たように「獨善」の様々な表現にも、自ずと深い共生の思想がある。

白居易の共生思想はどのようなものだろうか？白居易の兼濟・獨善を支えるのが共生思想であることを見よう。

白居易が友人と共に酒を飲むのを喜ぶこと、動物に対して人に対するのと同じ感情を抱いていること、草木にも人と同じように向かっていること、これらのことは上に見た。

ここでは「裘」を詠じる詩を例として、白居易の共生思想を確かめよう。白詩には、「裘」を着た時の暖かさを詠じる詩が多数ある。その中に、暖の快適を詠じつつ（獨善）、同時に、貧士も多くの民もみな自分と同じようにこの快適な生活を享受して欲しいという願望（兼濟）を示す詩がある。こうした願望は彼のわかい時の詩歌のうちにすでに見え、晩年の詩歌のうちにも常に現れる。

ここにはわかい時と晩年の二首を挙げよう。

「新製布裘」0055(元和二～十年[807～815]):

桂布白似雪，吳綿軟於雲。……誰知嚴冬月，支體暖如春。

中夕忽有唵，撫裘起逡巡。丈夫貴兼濟，豈獨善一身。

安得萬里裘，蓋裹週四垠。穩暖皆如我，天下無寒人。

桂州の布は雪よりも白く、吳の綿は雲のように柔らかい。……この嚴冬の月

に、身体中が春のように暖かいのだ。夜中に思うことがあって、綿(わた)入(い)れの上着を撫でながらいきつもどりつする。一人前の男は「兼濟」、天下の民を救うことを尊ぶのだ、どうして「独善」、自分一人ばかりが快適であっていいものだろう。どこかに万里四方もある綿入れの上着を手に入れて、世界のはてまでおおいつつみ、誰もが私のようにほっこりと暖かくなって、世の中に寒さでこごえる人なぞいないようにしたいものだ。

「丈伏貴兼濟、豈獨善一身」の二句は、「独善」を否定しているかのようである。しかしここで否定しているのは「獨善一身」、すなわち、白居易が言うところの「獨善」、プライベートの快適、を追求することであり、白居易において「兼濟」、人民の快適を追求することと対立しているのではない。白居易は元和の前半、諫官に任ぜられている時、「兼濟」の理想の実現のために懸命だった。だから「豈獨善一身」の「豈」字は、自分だけの「獨善」に対する強い否定の意味を持っている。

白居易六十二歳の作《歲暮》2972(大和七年[833]、洛陽)：

慘淡歲雲暮，窮陰動經旬。霜風裂人面，冰雪摧車輪。
而我當是時，獨不知苦辛。晨炊廩有米，夕爨廚有薪。
夾帽長覆耳，重裘寬裹身。加之一杯酒，煦嫗如陽春。
洛城士與庶，比屋多飢貧。何處爐有火，誰傢甑無塵。
如我飽暖者，百人無一人。安得不慚愧，放歌聊自陳。

寂しく年が暮れていき、陰惨な天気も十日も続いている。風は人の顔を裂くばかりに寒く、氷雪は車輪を砕くほど固く張りつめている。こんな時節にも私は何の苦しみもなく安らかに日を送り、米も薪もあって活計にことかかず、暖かに着て酒さえ飲んでいて、暖かなこと春のようだ。翻って思うに洛陽の人は士人も庶民も多くは貧窮で、爐には火がなく甑には塵が積もり、自分のように飽食暖衣している人間は百人に一人もいない。無能無才でこの幸いを得ているのは慙愧に堪えない、だから放歌高吟してこのことを述べるのだ。

第六句「獨不知苦辛」の意は、「獨善一身」「一身獨暖」と同じである。白居易は、彼自身の欲望を重んじ、生活の快適を求めると同時に、他人を愛していること、特に貧しい民や困窮の士たちとともに自分が味わっているこの快適を、共に味わいたいとの思いを表現している。

こうした博愛に似る観念を、「共生思想」と呼んでいい。「共生思想」は、白居易の「兼濟」「獨善」の観念の根底をなしており、それが白居易の詩歌を全体として暖かさ
とやさしさに満ちたものになっているのである。

下篇：創作技法について

以下、杜甫の詩を外側（形式・技法等）から見た特徴を内容に即して述べる。

一 制作の分量と頻度

杜甫の詩作の頻度は白居易よりも高いこと、日記のように詠い、あらゆることを詠じて、百科事典のようでもあること、小稿の初めに述べた。

二 語と句の自在な配置と意味の凝縮

杜甫は語と句を自在に配置する。

一句中の語の自在な配置。例えば「旅夜書懷」0836に「細草微風岸、危檣獨夜舟」とある。この「細草」は「岸」に生えているのであり、「危檣」は「舟」に帆柱が高く立っているさまである。杜甫はこれを「微風」と「獨夜」を間において切り離している。この二句は「微風細草岸、獨夜危檣舟」としても、下句が下三平を除けば平仄に大きな問題はない。杜甫は「細草」「危檣」を初めに置くことで、頼りなく不安な感じを強調したかったのだろう。中国語は、本来、一文字が一音節の単音節語で、語と語の関係を示す語形変化（屈折という）や、助詞・助動詞が付属すること（膠着という）がない孤立語である。ここからこのような語の配置が可能になる。杜甫はその特性を自在に操った。

中国語は語の配置によって意味が決まる。従って、通則（多数の人がなじんだ語順）と異なる語順にすることは、読み手の意味把握の作業にとって大きな障害になる。この障害を克服しようとする読みの作業は、想像力を刺激して、意味形成を力動的なものにし、意味把握が完成した時の喜びを格別のものにする。

杜甫「陪鄭廣文遊何將軍山林十首（鄭広文に陪し何將軍の山林に遊ぶ十首）」其五0072の「綠垂風折筍、紅綻雨肥梅（緑は垂る風に折るる筍、紅は綻ぶ雨に肥ゆる梅）」。「垂緑」というが、一瞬、何の緑か分からない、「風折」を隔てて「筍」が目に入り、「筍の緑」だと知る、「紅綻」というが、何の紅だ？以下、上句と同様のプロセスがあつて（しかし、上句よりはずっと速やかに）、「緑の頭を垂れているのは風に吹き折られた筍、紅の肉が裂けかけているのは雨の水を吸って太った梅→韓成武訳」の意が浮かび上がる。

これを、白居易「代書詩一百韻（書に代うる詩一百韻、微之に寄す）」0608の「木秀遭風折、蘭芳遇霰萎（木秀でて風に遭いて折れ、蘭芳しく霰に遇いて萎む）」、木は高

いと強風に出遭って折れ、蘭は良い香りを放っていると霰に打たれて萎む（出る杭は打たれるの比喩）と比べてみよ。白居易の語順のなんとすなおなこと！

また杜甫「旅夜書懷」0836「細草微風岸、危檣獨夜舟」は、上に述べたように、「細草」「微風」「岸」のそれぞれをイメージして一つの場面に構成し、「危檣」「獨夜」「舟」のそれぞれをイメージして一つの場面に重ねあわせて、この二句の情景は浮かび上がる。

これを白居易「曲江」（顧本 4-1518）の「細草岸西東、酒旗搖水風（細草岸の西東、酒旗水風に揺れる）」、細い草が岸の西東に生え、酒屋の旗が春風に揺れる、と比べるなら、白居易の詩句のあまりの分かりやすさに読者は驚嘆するだろう。

杜甫には杜甫の大胆にして精緻な味わいがあり、白居易には白居易の平易にして明瞭な味わいがある。杜甫は、語順の通則を故意に破りつつ、想像力を刺激して、読者をこれしかない意味に導いている（ここに曖昧さはない）。白居易は、杜甫という大先達を仰ぎつつ、通則を尊ぶ巨大な「平易通俗」の世界を作り上げている。

句が通常の散文の順序とは異なるものが多数ある。

例えば「漢陂行」0092に「天地黷慘忽異色、波濤萬頃堆琉璃（琉璃の波が果てしなく広がる中に舟を乗り入ると、天候が急変して愉快的な気分が尽きるとともに恐れや不安が押し寄せてきた）」というのは、上句は天候が突如悪くなったことをいい、下句は見渡す限り波が湧き起りそれが琉璃のように透き通っていることをいう。実際の順序からすれば逆である。訳は実際の順にした。押韻のつごうもあるがそれは決定的理由ではない。天候の急変を強調するためにこの句の配置にしたのである。

杜甫の詩は僅かな文字が響きあって豊かな意味を伝えることが多い。「月夜」0141の結句「何時倚虛幌、雙照淚痕乾」。再会に流す感涙の一瞬、その涙が乾いていく長い幸せの時間。この場面と時間が二句十字に凝縮されている。

杜甫の詩を読むのはしばしば解凍作業のようだ。それだけに意味が浮かび上がる時の喜びも大きい。

三 迫真の表現—写実・比喩・誇張・擬人化

杜甫は中国で偉大な現実主義の詩人といわれる。眼前に見え、耳に聞こえる表現をしなければ自らを許さなかった詩人である。その迫真の表現は写実だけではなく比喩や誇張、擬人化等の技法をも駆使してなされている。

涙を素材にして、杜甫の迫真の表現の技法を確かめておこう。写実の妙の例は枚挙に暇がない。比喩と誇張の例を二、三挙げておこう。

「一百五日夜對月(一百五日の夜に月に対す)」0152の起句に「無家對寒食、有淚如金波(妻がいないまま、一人で寒食節を迎えると、涙は月に照らされて輝く波のように流れ落ちる)」という。「金波」は、黄金色の揺れ溢れる波のような月光。ここは、月光のように溢れる涙。捕らわれの長安で妻を思って流した自分の涙を喩える。閨怨詩で「金波」に照らされる美女を表現した例はあるが¹⁷、自分の涙を「金波」になぞらえるのは杜甫が初めてである。

「風疾舟中…」1457(既掲)に「家事丹砂訣、無成涕作霖」という。「霖」は長雨。涙が流れて止まらないのを喩える。人生で何事も成し得なかったとの痛恨がこの比喩を生んだ。

誇張。杜甫は誇張を好んだ。「茅屋為秋風所破歌」0487に「安得廣廈千萬間、大庇天下寒士盡歡顏、風雨不動安如山(千万間もの広い屋敷、その屋根に世の貧しい人を全て覆って笑いあう、そんなことがどうにかなわないものか。風雨にも動かず山のようにどっしりとした家)」の「千万間」というのはその一例。

涙では「得舍弟消息(風吹紫荊樹)」0216に「猶有淚成河、經天復東注(涙の河が天の河と合流してお前のいる東方に注ぐ)」という。弟から便りを得ての感激の涙である。誇張の極。壮大な涙だ。

擬人化も比喩の一類あるいは比喩に隣接する技法である。杜甫の共生の思想は自ずとその詩を擬人化された表現で満たす。

「絶句漫興九首」其一 0434に「眼見客愁愁不醒、無頼春色到江亭。即遣花開深造次、便教鶯語太丁寧」というのは、春が擬人化されている。次節に詳述。

「後遊」0433「寺憶曾遊處、橋憐再渡時。江山如有待、花柳更無私(寺を見て思い出す、前に遊んだ所を。橋が愛おしい、再び渉るこの時に。川や山は私を待っていたかのように、花々や柳は全く惜しみなく美しさを見せてくれる)」。江山も花柳も擬人化されている。

「南楚」0859では「無名江上草、隨意嶺頭雲(長江の川辺には名も知らない草が萌え、山の嶺では雲が気ままに漂っている)」と、雲を擬人化している。

¹⁷ 注3を参照。

花を擬人化する例は余りに多い。花木への愛の節での、花を詠じる詩はほとんど花を擬人化していた。

犬や鳥の擬人化についても上に見た。

鳥の例を一首加えておこう。

上元二年（761）春「春水生二絶」其一 0459：

二月六夜春水生、門前小灘渾欲平。鷓鴣鸚鵡莫漫喜、吾與汝曹俱眼明。

春も盛りの二月六日の夜に出水があった。門の前の小さな浅瀬が水に浸されて全て平らになりそうだ。鷓鴣もオシドリもむやみにはしゃいでいるがちょっと待っておくれ、私もお前たちと一緒に目の前が明るくなってうれしいのだよ。

杜甫は、水かさが増したのを喜んでいる。水鳥たちがはしゃいでいるのに対して、お前たちだけがうれしいんじゃない。杜甫は鳥に向かって「汝」と呼びかけている。

18

全てが余りに自然に擬人化されている。杜甫には擬人化の意識さえなかったかもしれない。時に無機物さえも擬人化する。広徳元年（763）、夏から秋にかけての作「櫻拂子」0666に「吾老抱疾病、家貧臥炎蒸。啞膚倦撲滅、頼爾甘服膺（年を取って病気持ち、貧乏で暑苦しい中臥せっている。肌を噛みにくる蠅を撲滅するに疲れるが、払子に頼ってなんとか追っ払っている）」という。老いて病の身の自分が、「爾」、お前のおかげで蠅を追っ払うことができる、ありがたいことだと、棕櫚の払子を褒めたたえている。

白居易「別春爐」2395が、火鉢を擬人化するのは上に見た。杜甫は無生物をも擬人化する先駆である。

四 口語の使用

白居易が詩に多数の口語を用いているのは定論だが、その先蹤は杜甫である。杜甫の全詩を見るに、それは春と深い関わりを持っている。¹⁹成都での作を見ておこう。

「絶句漫興」九首其一 0434：

¹⁸ 小川環樹「唐詩を中心にして」（『週間朝日ゼミナール』25、1970。『小川環樹著作集』2、266頁）にこの詩の擬人法を論じる。

¹⁹ 下定雅弘「白詩は杜詩の口語をどのようにとりいれたか？—春と老いの表現をめぐって—」、〈白居易研究年報〉4、2003。1-34頁。

眼見客愁愁不醒、無頼春色到江亭。即遣花開深造次、便教鶯語太丁寧。

おれが旅の愁いに酔っているのを眼前に見ていながら、自分勝手な春景色が江亭にやってきた。花を咲かせるのがあまりに早いじゃないか、鶯が囀るのもしつこすぎる。

この詩には、「無頼」「造次」「太」「丁寧」と多くの口語が用いられている。「無頼」は、いうことを聞かない無頼漢。「造次」は、あわただしい。「太」は、あまりに。「丁寧」は、何度もくりかえすの意。この詩において春の訪れは、それに心を一体化できず、「客愁」を強める悩ましきものである。

杜甫は揺れ動く、狂おしくせつない思いを表わすのに通常の文言では満足できなかった。ここに、大量の口語が、杜甫の詩の世界に流れこむことになったのである。

白居易はこの詩を意識しつつ、「何処春先到」2778を詠じた。

何處春先到、橋東水北亭。凍花開未得、冷酒酌難醒。

就日移輕榻、遮風展小屏。不勞人勸醉、鶯語漸丁寧。

春はまず橋の東、川の北が小亭にやってきた。寒さのために固く蕾が結んでいてまだ花が咲きそうもない。冷酒を酌めばいつまでも腹にたまっていて醒めない。日当たりのいい処を選んで腰掛けを持ち出し、小屏風を広げて風を遮り、独り静かに日向ぼっこをしていると、人に代わって酒を勧めるように、鶯が頻りに鳴いている。

大和四年(830)、白居易五十九歳、洛陽で太子賓客分司の任にあった時の作。この詩は、春ののどかな訪れを、たっぷりと味わおうとする気持ちを詠じている。結句は、人に酒を勧められるまでもなく、鶯の鳴き声がだんだんと「丁寧」、しげくなるので、その鳴き声を聞いているだけで、春に酔うような気分になるといっている。杜詩の「鶯語太丁寧」を「鶯語漸丁寧」とわずかに変形しているのだが、「丁寧」な「鶯語」は、杜甫においては愁いを深めるものであり、白詩においては春の訪れを陶然と味わわせてくれるものである。

杜甫は、表現しようとする事がらに依じて、多種多様な口語を柔軟に用いた、しかし、その口語使用の大動脈に、春への思いがあったことが、以上の調査により明らかである。春の華やぎと生命力に接する時、杜甫は、もっともコントロールしがたいアンビバレンツともいえる感情にとらわれた。一面では、春の輝きに接して「白髪は春事に非ず」といつつも、同時に「且つは芳樽を尽くして物華を恋わん」といって、

春を恋い慕う思いを示し、また「花に悩まされ徹せず」、もっと狂おしい思いに投げこんでほしいとさえいっている。

杜甫は、この二つの方向に揺れ動く、狂おしくせつない思いを表わすのに、通常の文言の世界の言語では、とうてい満足することができなかつた。ここに、大量の口語が、杜甫の詩の世界に流れこむことになったのである。春への思い、春がもたらす喜びと苦しみ、この相剋が生む、狂おしさ、せつなさ、やるせなさ、これこそが、杜甫の詩をして大量の口語を用いさせた最大の原動力である。

左拾遺時代の杜甫の春とたわむれる感情が、成都の杜甫の春と老いとがからみあうせつなく狂おしい感情が、白居易の詩の嘆老惜春を大量の口語で表現させる、いわば水先案内人になった。

春の輝きと老いの悲しみとは、白居易にとっても、その人生のおりおりにおとずれる、生きてあることのリズムの一部であり、特にその後半生の詩作の大動脈ともいえる主題だった。白居易が、杜甫の春と老いに関わる詩に着目し、ここから多くの表現を学んだのは当然だろう。

五 双声・疊韻・疊字

双声・疊韻・疊字は、多く対句に施される詩語の技法。これを配することにより対偶効果を一層高めることができる。双声は声母（語頭子音）が同じ文字を並べた語。疊韻は同じ韻母の文字を^{かき}重ねた語。疊字は同じ文字を^{かき}重ねた語である。

双声・疊韻の技法を示すよく知られた詩を挙げよう。

疊字はほとんどが擬態語・擬声語。日本語でいえば、サラサラ、ドンドンといった類の語であり、生理的な実感を高める。

ここには、杜詩の対句中に双声・疊韻を配した例と、疊字を用いた例をそれぞれ幾つか挙げておく。

【双声・疊韻】

「初月」0319の頸聯に、「河漢不改色、關山空自寒(天の川は色を変えず、あたりの山はただ寒そうだ)。「河漢」は双声語。「関山」は疊韻語。

「遣憂」0691の首聯はほぼ対句で、双声語を配している。「亂離知又甚、消息苦難真(ひどい戦乱で人々がちりぢりになったと聞いたが、辛くてその知らせを本当とは思えない)。「乱離」は戦乱で人々がちりぢりになるさま。「消息」は我々も使う普通の語

だが、双声語を対応させて、戦乱の悲哀を強く印象づけている。

「宿府」0778の頸聯の対句。「風塵荏冉音書絶、關塞蕭條行路難(戦乱のままに時はそうそうと過ぎて故郷からの便りは絶え、関所のあたりはひっそりとひと気もなく旅路はつらい)。「荏冉」は双声語、歳月が過ぎ去っていくことをいう。「蕭條」は疊韻語、もの寂しいさまをいう。いずれも擬態語である。

「八陣圖」0881に「功蓋三分國、名成八陣圖(諸葛孔明の功は三つの国を圧倒するほどであり、軍師としての名声は八陣図によって確立した)。「功蓋」は双声語、「名成」は疊韻語。いずれも主述構造である。

「十二月一日三首」其三[0856]に「春來準擬開懷久、老去親知見面稀(春になったら思いを晴らしたいとずっと待ち構えている、年をとっては親友と顔を合わせることも滅多にない)。「開懷」は双声語、「見面」は疊韻語で、いずれも動賓構造である。

「奉送二十三舅録事之攝郴州(二十三舅録事の攝に郴州に之くを送り奉る)」1434の最後にいう。「郴州頗涼冷、橘井尚凄清。從事何蠻貊、居官志在行(任地の郴州はたいへん涼しく、橘井[漢の仙人蘇耽が掘った井戸]は今なお冷たく清らかな水が湧いている)。「涼冷」が双声、「凄清」が疊韻で、いずれも擬態語。涼しい・清らかなを重ね強調して、任地へ向かう「舅(母方のおじ)」を励ましている。

なお、『杜甫全詩訳注』に双声・疊韻を注記するに当たり、丸井憲氏の行った調査によれば、杜詩中、双声の登場回数は全部で九三六、疊韻のそれは全部で七八九とのことである。

【疊字】

疊字は、ほとんどが擬態語・擬声語である。日本語でいえば、ドンドン、サラサラ、ビクビク、スクスクといった類の語である。これを活用することで、その一句あるいは対句は目にありありと見え、耳にはっきりと聞こえ、肌に感じられる表現となる。その効果を確認するために二、三の例を挙げておく。

「江畔独歩尋花七絶句(江畔独歩して花を尋ぬ七絶句)」其七[0475](「花木への愛」に既掲)の後半。「繁枝容易紛紛落、嫩蕊商量細細開(枝一杯の花々はたやすくハラハラと落ちてしまう、だから幼い柔らかな花よ、よく時期を見計らってポチポチ開いておくれ)。「急」と「緩」とのコントラストを疊字の擬態語で際立たせ、春への愛と老いの悲しみがせめぎあう心情を表現している。

「登高」1213(既掲)の疊字を含む対句。「無邊落木蕭蕭下、不盡長江滾滾來。「蕭蕭」は、ここでは木の葉が落ちる音を示す擬声語。「滾滾」は長江の流れの力強さを

表す擬態語。

「季秋に蘇五弟纓、江楼にて夜崔十三評事・韋少府姪に宴す三首(季秋に蘇五弟纓、江楼にて夜崔十三評事・韋少府姪に宴す三首)」其三[1225]の前半に「明月生長好、浮雲薄漸遮。悠悠照遠塞、悄悄憶京華(明るい月が天に上るのはいつも素晴らしいが、今夜は薄い浮雲がしだいに光を遮っている。月は都から遙か遠い夔州の城を照らしているが、私は憂いに沈んで都を思い出す)。「悠悠」は、ここは距離が限りなく遠いことの形容、「悄悄」は愁いに沈むさま。日本語のオノマトペには訳しにくい、「youyou」「qiaoqiao」の疊字による同音の反復は、都を離れ僻遠の地にある杜甫の憂愁を深く実感させる。

白居易は疊字を多用したが、疊字を用いる詩の数では、杜甫が半数近くの詩で疊字を用いるのに対して、白居易は四割弱。その比率は杜甫が上である。²⁰杜甫は理念や思想の表現に長けると同時に、生理的実感をも極めて重んじた詩人である。

まとめに代えて

杜甫と白居易とは、生きた時代がちがう、その経歴も異なり、生活環境もちがう、人格も異なる。その詩風に大きな違いがあるのは当然である。

だが、二人は、にもかかわらず、小稿で見たように、少なくない点において、大きな類似・共通性がある。

それは、

- 1、作品量が極めて多い。唐の詩人の中で、二人は突出している。
- 2、白居易がいう兼濟・独善の両面を、杜甫もまたその実質を備えている。社会の平和と安定を求めての兼濟に関わる表現も、公を離れての私的な領域での哀歎も、生きて遭遇し、味わい、思うあらゆる事柄を、詩を毎日のように作り続けている。人生と生

²⁰ 据筆者調査、疊字的種類、杜甫約 240 種、白居易約 370 種。白詩比杜詩多 1、5 倍。但是用疊字的詩的數量來看、杜甫約 630 首用疊字。即 43%的詩采用疊字。白居易約 1360 首采用疊字、即 37%的詩采用疊字。用疊字的詩歌的比率來說、杜甫比白居易還要多。我們可以看出來、杜甫多麼重視生理上的實感。爲參考、表示白居易之前著名詩人用疊字的情況。李白詩的疊字、其種類 93、整個詩歌中使用疊字的比率 11.23%。同樣、王維的詩歌、43 種類、10%。韓愈、177 種類、33%。柳宗元 43 種類、19%。杜詩和白詩對疊字的重視唐詩中確實突出。

活に関わるあらゆることを詠じる。

3、自分のその思い・感動を、人に伝えるべく、最大限の力を尽くしている。様々な分野・事柄についての、真率で工夫を凝らした比喻や誇張・動植物の全てを、そして無生物さえをも擬人化する表現・口語の多用・疊字の多用等、生理的実感を極めて大切にしたところにも、それは確認できる。

4、その思いは、しばしば、共生思想に支えられている。全ての動植物が自らと同じように、健気に生きている、また逆に自らをも万物の一とみる思想が、二人には確立している。

以上のようなことを、確認できた。

では、これらの本質にあるものは何か？これらの根底にあって、両者の共通性を生み出しているものは何か？

それは、まず第一に、自らの思想・心情・感性を重んじ、それに忠実であることである。白居易が持っていた自己愛・自己実現の願いは、杜甫にもそのまま見られる。第二に、二人は比類ない詩人であり、詩が命だった。「語人を驚かさずんば死すとも休まず」という詩作への気魄は、白居易もまた持っていた。

それゆえに、伝統・規範・常套表現に満足することなく、あくまで自己の思い・心情・観察を、表現することに、二人は命をかけたのである。

この思想・人生観・表現に対する態度は、安史の乱を経て後の、律令体制が崩壊し、旧来の伝統・規範などが崩壊して以後の中唐の知識人たちにとってはかなり普遍的なことだった。

川合康三はいう。「それまで共有されてきた世界観の中唐における解体は、同時に因襲の呪縛からの解放でもある。文学を成立させていたものが変質し、中唐の文人は個々に世界を認識し、独自に文学を築き上げていくことになる」。²¹

だが、杜甫が生きた時代には、そのような思想・感性を持つ知識人はごく稀だった。杜甫は、白居易のみならず、中唐の著名な詩人たちの、最も重要なことにおける巨大な先駆者だったといえる。

杜甫の特質を述べるには、白居易のみでなく、杜甫と同時代のその他の詩人、また白居易と同時代の韓愈・元稹他の詩人・詩作との比較が必要である。そしてまた唐か

²¹ 「終南山の変容」、中国文学報 50、1995. 67 頁

ら宋への変化をも大きく視野に入れた考察が必要である。その作業は今後の課題としたい。小稿は、それを白居易について行った。他の詩人との比較は、今後の課題としたい。 2019. 4. 24